

比較文化論

No.40

日本比較文化学会第44回全国大会

2022年度国際学術大会

発表抄録

於 山形大学小白川キャンパス

(対面&オンライン ハイブリッド開催)

2022年5月21日(土)

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

〈海外提携学会〉

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

淡江大学村上春樹研究センター

台湾日本語教育学会

台湾応用日本語学会

(後援)

山形大学

日本比較文化学会第44回全国大会・2022年度国際学術大会

理事会関係者会議

- 日時: 2022年5月20日(金)
- 会場: 大学コンソーシアムやまがた ゆうキャンパス・ステーション
(山形市緑町1-2-36 遊学館2階)
 - 編集委員会: 14:45~15:45
 - 理事会: 16:00~17:00

日本比較文化学会第44回全国大会・2022年度国際学術大会プログラム

会場: 山形大学小白川キャンパス(山形県山形市小白川町1丁目4-12)

- スケジュール:
 - 2022年5月21日(土)
 - 8:45 受付開始
 - 9:10~9:50 総会及び理事会(人文社会科学部棟103教室)
 - 10:00~10:15 開会式(人文社会科学部棟103教室)
 - 10:15~11:45 シンポジウム(人文社会科学部棟103教室)
テーマ:「比較文化と共創社会」
 - 13:00~16:40 研究発表(人文社会科学部棟、会場については後述)
 - 16:50~17:50 講演(人文社会科学部棟103教室)
尤 銘煌(山形大学学士課程基盤教育機構教授)
「山形大学留学生OBから見た
日本の企業文化及び会社へのアプローチ方法」
 - 17:50~18:00 閉会式(人文社会科学部棟103教室)

- 今大会において、懇親会は諸般の事情により不開催といたします。
- 本年度の大会は zoom を用いた、対面&オンライン併用のハイブリッド開催となります。ただし、今後、コロナウイルス感染が再拡大した場合は、オンラインのみの開催に急遽変更することもあり得ます。そこで今大会ではオンラインのみの開催の可能性にも留意し、下記①～②の対応をとりたいと思います。
- ① 今大会にご参加予定の方々は全員、対面またはオンライン参加のいずれの場合でも、下記 URL または QR コード先にあるフォームより、事前登録をお願い申し上げます。事前登録の締め切りは 5 月 15 日(日)といたします。

<https://forms.gle/xo473WRNJHoUimpVA>



- ② 登録者の皆様には、上記の事前登録の締め切りの直後に、大会用 zoom ログイン URL やパスワード等の情報を、大会実行委員長からメールで別途ご案内いたします。ハイブリッド開催あるいはオンラインのみ開催のどちらの場合でも、zoom の URL 等是不変わりますので、オンラインで参加予定の方々は、上記の情報を用いて各会場にご入室ください。
- 発表者の皆様には大変恐縮ですが、安定したインターネット回線の確保のため、発表の際にはビデオクリップ等の動画の使用はお控えくださるよう、お願いいたします。(YouTube 等を通じた事前配付資料としては可能な限り対応しますので、必要に応じて大会実行委員長までご連絡ください。)
- 発表会場のインターネット接続は、原則として有線のみとします。大会当日、会場にお越しのうえ、ご自身の PC ならびに zoom アカウントを用いてハイブリッド形式で発表される皆様は、必ず LAN 端子(LAN ケーブルの差込口)付きの PC をご持参ください。(ご自身の PC に LAN 端子が無い場合は、USB 接続等の LAN 変換アダプターも、PC といっしょにご持参ください。)各会場には発表者用の LAN 回線ケーブルを準備しておきますので、発表者はこの回線を用いてご自身の PC を zoom に接続し、発表することが可能です。
- 会場となるそれぞれの教室には、WindowsPC 1台と zoom アカウント1つを、当方で確保しておきます。この会場備え付け PC を用いて発表する場合は、プレゼン用ファイルを USB 等に入れてご持参ください。(ただし、プレゼン時の書式崩れを防ぐため、発表用レジュメはあらかじめ PDF 化してご持参いただく方が、安全かと思います。)
- 研究発表時にレジュメを配る場合は、zoom のチャット機能を通じておこないますので、各自で配付用ファイルをご準備ください。また、会場にお越しのうえで発表時に印刷版レジュメを配る場合は、20 部をご持参ください。

シンポジウム 「比較文化と共創社会」

10:15~11:45 人文社会科学部棟、103 教室

(オンライン参加用 zoom 情報については p.2 の注意書きを参照)

司会

関東支部より:

郭潔蓉(東京未来大学教授)

パネリスト

1. 九州支部／中国四国支部より:

塚本美紀(西南女学院大学准教授)

共創社会実現のための異文化間能力の育成:日本とカンボジア学生の交流について

2. 中部支部／関西支部より:

那須野絢子(常葉大学助教)

共感と共生の異文化理解:ラフカディオ・ハーンと柳宗悦の眼

3. 韓国日本文化学会より:

趙軒求(韓国日本文化学会文学分科理事・慶北大学校准教授)

共創世界への未来、人文学はなにを問うべきか。

4. 台湾日本語文学会より:

邱若山(台湾静宜大学教授)

日台文化共創の一事例:「百年の旅びと——佐藤春夫 1920 台湾旅行文学展」について

5. 台湾日本語教育学会より:

黃翠娥(台湾日本語教育学会監事・輔仁大学日本語文学科教授)

「デジタル・ラーニング・パートナーズ・プロジェクト」について

6. 台湾応用日本語学会より:

董莊敬(台湾応用日本語学会理事長・文藻外語大学ヨーロッパ・アジア語文学部学部長)

ポストコロナ時代におけるグローバル人材の育成

研究発表

(オンライン参加用 zoom 情報については p.2 の注意書きを参照)

第1室(人文社会科学部 1 号館 201 教室)

1 部 13:00-14:30

司会 北林利治 (京都橘大学教授)

- 橋尾晋平(名古屋外国語大学言語教育開発センター外国語担当専任講師)
日本人初級英語学習者のコミュニケーション能力の伸長を目指した英語ディベート
「シンプル・ディベート」の実践研究——オンライン授業での授業実践を通して——
- 東本裕子(横浜商科大学准教授)
COIL(Collaborative Online International Learning)を利用した異文化交流の
試み
- 白須洋子(サイバー大学准教授)
オンライン授業による英文ライティング指導の可能性

2 部 14:40-16:10

司会 白鳥絢也 (常葉大学准教授)

- 河内健志(高崎経済大学非常勤講師)
「V + 切る」における前項動詞の限界性の弱化——「勝ち切る」「決め切る」を例に——
- 斎藤隆枝(国際医療福祉大学助教) 河内健志(高崎経済大学非常勤講師)
高橋栄作(高崎経済大学教授)
GIGA スクール構想導入初期における中学校間の ICT 機器使用状況及び意識の差
- 高橋栄作(高崎経済大学教授)
教育 DX の先にあるもの

第2室(人文社会科学部1号館202教室)

1部 13:00-14:30

司会 金志佳代子 (兵庫県立大学教授)

- 上田太郎(同志社大学文化情報学研究科博士後期課程) 山内信幸(同志社大学教授)
英語の「文法」と「語法」のはざまに関する一考察——二重否定表現における言語使用の実態と言語規範の意識の不一致を手がかりにして——
- 佐古恵里香(京都精華大学非常勤講師) 山内信幸(同志社大学教授)
中上級日本語学習者の日本文化理解と母語の転移に関する一考察——「民話」を素材とした課題文における視覚イメージの分析——
- 山本茉莉(同志社大学文化情報学研究科博士前期課程) 山内信幸(同志社大学教授)
いわゆる「itの特別用法」をめぐる再考察

2部 14:40-16:10

司会 八尋春海 (西南女学院大学教授)

- 王子涵(同志社大学文化情報学研究科博士後期課程) 山内信幸(同志社大学教授)
魯迅の『狂人日記』の翻訳に関する一考察
- 李恵慶(大阪経済法科大学客員研究員)
北朝鮮怪獣映画『プルガサリ』をめぐる一試論——ナショナルな想像力とテキストの余白を中心に——
- 栢山剛(鳥羽商船高等専門学校准教授)
太平洋戦争勃発における山本五十六の軍事戦略とハル・ノート

第3室(人文社会科学部1号館203教室)

1部 13:00-14:30

司会 佐藤和博 (弘前学院大学教授)

- エスカンド・ジェシ(大阪大学大学院人文学研究科招聘研究員)
現代日本ファンタジーにおける異文化の商品化と文化の盗用の問題について
- 黄如萍(国立高雄餐旅大学応用日語学科准教授)
横溝正史「面影双紙」論
- 石川隆男(台湾大学兼任助理教授)
物語世界に描かれた共創 コロナ禍の芥川賞文学を例に

2部 14:40-16:10

司会 中村友紀 (関東学院大学教授)

- 風早悟史(山陽小野田市立山口東京理科大学講師)
『平家物語』における白詩へのアリュージョンの英訳方策
- 葉菱(淡江大学准教授)
環境文学の視点で読む村上春樹『東京奇譚集』
- 曾秋桂(淡江大学教授)
AI技術のテキストマイニングによる村上春樹文学研究——『神の子どもたちはみな踊る』を中心に——

第4室(人文社会科学部1号館204教室)

1部 13:00-14:30

司会 林裕二 (西南女学院大学教授)

- 山本美津子(京都医療科学大学講師)
小規模単科医療系大学における初めての日米連携型 COIL 実践と課題
- ルツケル瀬本阿矢(立命館大学准教授)
語学教員から見た第三期教育における多言語主義の現状と未来——日本とスペインの比較研究——
- 橋本恵子(福岡工業大学短期大学部准教授)
為政者の歴史的演説に対する印象評価に関する日中比較

2部 14:40-16:10

司会 山下明昭 (大和大学教授)

- 松井一美(国際交流基金関西国際センター専門員)
平澤佳代(朝陽科技大学助理教授)
日中同形語「進歩」の用法に関する日中コーパスからの一考察
- 陳李(東北大学国際文化研究科博士後期課程) 上原聡(東北大学教授)
空間移動パターン「Vてくる」における視点分析——中国語の移動表現“V来”との対照的観点から
- 落合由治(淡江大学日本語文学科特聘教授)
テキストマイニング技術から見た比較言語研究の可能性——文章表現の社会的ジャンルの共通性から

第5室(人文社会科学部1号館102教室)

1部 13:00-14:30

司会 樋口謙一郎 (椋山女学園大学教授)

- 吉田若菜(フリーランス)
21世紀の「文化」の視座——「近圏 closeness」と「遠圏 distance」の概念
- 楊妍(東北大学文系特任助教)
近代中国における女性同性愛を巡る言説の考察——日本との比較を中心に——
- ウォント盛香織(甲南女子大学教授)
フィリップ・クレイの死とハーグ国際養子条約の問題点に関する考察

2部 14:40-16:40

司会 佐藤静 (宮城教育大学特任教授)

- 大谷鉄平(北陸大学講師)
オンライン国際交流プログラムの実施と課題
- 森崎巧一(京都経済短期大学教授) 郭潔蓉(東京未来大学教授)
小路真木子(京都経済短期大学教授)
「日本のポップカルチャーを対象とした印象評価の検討——印象語調査と印象評価アンケートツールの開発——」

司会 澤田敬人 (静岡県立大学教授)

- 関口英里(同志社女子大学 学芸学部 メディア創造学科教授)
「繋がり」と地元愛を促進するプロジェクト・プランニング——地域社会の将来的発展と活性化にむけて
- 森下一成(東京未来大学教授) 郭潔蓉(東京未来大学教授)
多文化共生が進む自治体における地域連携活動 「足立区大学生地域活動プラットフォーム」活動報告

共創社会実現のための異文化間能力の育成：
日本とカンボジア学生の交流について
塚本美紀
(西南女学院大学准教授)

グローバル化が急速に進展する中、異なる文化的背景を持つ人々との「共生」が求められてきたが、グローバル化はますます進み、共に生きる段階から、共に創り出す「共創」の段階へと進むことが求められている。一部の人々や特定の国や地域だけでは解決できない地球規模の課題が次々に発生しているからである。さまざまなルーツや立場、多様な世代の人々による「共創」が実現しなければ、持続発展可能な社会を作っていくことはできないのではないだろうか。一方で、グローバル人材育成が急務であると言われている。グローバル人材の定義はさまざまありグローバル人材に求められる能力は多岐にわたっているが、ここでは、異文化間能力について考えたい。国境を越えて多くの人や物や情報が行き来する今日の社会では、異なる文化的背景を持つ人々にうまく対応していくことが特に大切だと考えるからだ。そして、異文化間能力は「共創」のために必要な能力と重なることも多いのではないか。

異文化間能力とは、異文化間のやりとりにおいて効果的かつ適切なコミュニケーションと行動ができることであり、言語的な流暢さも必要とするが、それだけでは不十分である(Deardorff, 2016)。また自然に身につくものでもない(Jackson, 2011)。そこで、本学ではさまざまな国際的なプログラムを実施しているが、ここではカンボジア学生との交流について述べたい。

コロナ禍以前は、日本とカンボジアの両国で活動している NPO の協力を得て、年に一度カンボジアへのスタディツアーを実施するとともに、カンボジア人学生の受け入れも実施していたが、2021 年はオンラインで交流を継続した。両国の学生はこれらの交流を通して、異文化間能力を身につけるためのきっかけを体験することになる。そこで知り得たことや体験したことは自分の知っている世界の外には広大な無知の世界が広がっていることを窺い知るきっかけとなり、そのことが異文化間能力を向上させることにつながることを期待している。このプログラムは両国の中等教育及び高等教育の生徒・学生及び教員が参加しており、このプログラムの実施そのものが「共創」とも言えるかもしれない。

Deardorff, D. K. (2016). How to assess intercultural competence. In Z. Hua (Ed.), *Research methods in intercultural communication: A practical guide* (pp. 120-134). Chichester, UK: Wiley Blackwell.

Jackson, J. (2011). Host language proficiency, intercultural sensitivity, and study abroad. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 21, 167-188.

シンポジウム「比較文化と共創社会」
人文社会科学部棟 103 教室
10:10～11:40

共感と共生の異文化理解：
ラフカディオ・ハーンと柳宗悦の眼
那須野絢子
(常葉大学外国語学部助教)

「比較」とは異なるものを比べ合わせることである。では、なぜ人は異なるものを比較するのか。比較することで私たちは比較対象間の「違い」に気づく。その自覚した「違い」を自己の内部で洞察し消化すること、これが比較行為の目的ではないだろうか。ここで紹介するラフカディオ・ハーン(1850-1904)と柳宗悦(1889-1961)は、ともに異文化に接触し、その異質性に共感し、異なる物の共生により生まれる新たな価値の共創を説いた人物である。

ハーンはアメリカでの新聞記者時代、白人至上主義のもと虐げられていた黒人やクレオールという言葉、音楽、民話を積極的に取材し、記事に残したことで知られる。来日後のハーンは、当時まだ発展途上国であった日本文化を愛し、西洋化のために日本人自らが古来の文化を捨て去ろうと躍起になっていた現実に幻滅した。日本賛美者として知られるハーンであるが、彼が理想としたものは、日本が先祖伝来の道徳観、美学を守りながら新しいものを受け入れ、新旧を上手く融合させていくことであった。このことをハーンは、帝大での文学論においても語っている。

一方、民藝運動の中心人物で知られる柳宗悦は、日本統治下の朝鮮、そして、アイヌ、琉球といった当時の日本におけるマイノリティな周辺領域の文化的価値を唱え、自身の足で現地を訪れ、現地の人と交流をし、強い力のもとで失われつつある美術を集めて旅をした。ハーン文学の愛読者でもあった柳は、日本統治下の朝鮮における最大の民族運動三・一運動の勃発にともない、エッセイ「朝鮮人を想う」を『読売新聞』に連載した。ここで彼は日本におけるハーンを引き合いに出し、他国を理解する道を説いたのである。

異国、異文化との接触が、極めて排他的な帝国主義を生み出した時代におけるハーンと柳の文芸活動が残した遺産、後世に発するメッセージは大きい。GHQ 総司令部で対日心理戦を担当したボナー・フェラーズがマッカーサーに提出した「天皇に関する覚え書き」執筆の背景には、愛読していたハーンの著作による日本理解があったという。また、柳の朝鮮に対する思いは、朝鮮総督府の建設で取り壊しの危機に瀕していた光化門の保存へと繋がった。

「野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであろうか。互いは互いを助けて世界を単調から複合の美に彩るのである。」(『柳宗悦全集第二巻』より)柳が記したこの言葉のとおり、世界の未来が、平和、そして共創社会へと進んでいくためには、異なるものとの違いを受け入れ、複合の美を見いだすための「比較」が必要となるのである。

共創世界への未来、人文学はなにを問うべきか。

趙軒求

(韓国日本文化学会文学分科理事・慶北大学校准教授)

現在、世界で最も消費されているコンテンツはゾンビである。アクロバティックな動きと集団的な攻撃性はスピーディーな画面展開にともなう圧倒的な没入感を与え、それにぴりつとした恐怖感まで抱かせる。「生きている死体」から出発した B 級の感性が今はカルチャーのコンテンツとして注目を浴びているのは不思議である。元々、ゾンビは集団無意識の群衆を象徴化した、一種の全体主義に対する隠喩から始まったと思われる。同じ意識を共有する集団の超連結といえるだろう。だが、最近消費されているゾンビに関するコンテンツの物語は次第に変化している。既存の物語であれば集団無意識に近かったゾンビとそのゾンビに追われるほかはなにもできない人々の姿が筋の全部だったが、今はそういうゾンビらと対抗する、異質な存在から人を守る相互交差性のある物語が構築されている。また、ゾンビの根源をウイルスからのものにして、それを創造し拡散することが目的である人、そしてそのウイルスに感染されてゾンビ化される一人一人の物語、すなわち個人の独立性と個性がそのままストーリーになっている。全体主義から始まった集団的狂気の産物、人としての理性を失ったゾンビが個人化されて、目的性を持つことになっているのである。

近代は神との差別的な特性を基に「個人」を構築した。言い換えれば、ヒューマンとしての「私」の共通点を新たに構築し、それを基に超連結されたのが「個」であり、それが「理性」として帰結された。その意味で、ヒューマニズムは根源から排他性を持つ。そして、そういう考えのプロセスが大きな物語の因果論を誕生させ、20 世紀を貫く最も重要な理論になった。神が語る時代から人間の理性によって語られる時代に変化され、ヒューマンとして問いかける人文学の本質も大きな物語の因果論に陥没された。その結果、ヒューマン以外の存在と差別化するための研究はヒューマン自体の探求につながって、ヒューマニズムに基づくすべての活動はより一層、差別化された「個」を生み出した。結局、「私」と「個」の曖昧な隙間からヒューマンの本質を糾明しようとした、それが 20 世紀の人文学が指向するベクタではなかっただろうか。

しかし、20 世紀を通して人文学は「私」と「個」の分離を経験し、ヒューマン以外の存在と何が異なるのかを探することは不可能であると認知できたと考えられる。「私」が「個」をメタレベルで観察する。その結果として構築されたすべてはヒューマンを含む存在なのか、ヒューマンを代える存在なのか、その曖昧さが発生したのである。結局ポストヒューマンまたは、インヒューマンの概念が人文学の境界を構造的に崩れさせる結果に繋がらないだろうか？ そうであるとすればヒューマンを探求する人文学も建てられた境界の交流領域を越えて、全く新しい領域に進む必要がある。すなわち人文学、社会科学、自然科学の区別自体がヒューマンという概念的区別によって生じられた大きな物語であれば、領域の破壊を呼ばせられる新しい物語言説が必要である。

2020 年から続けられたパンデミックの末に「個」と「個」のリンクは薄くなっている。いわゆるグローバルイゼーションという大きな物語の没落である。そして、その対案としてスローバライゼーションが浮び上がっている。他には今のカルチャーをグローカリゼーションとして語っている。しかし、こういう概念は人文学から距離を置いている。果たして、人文学は今の時代にどんな質問を問うべきなのか？ 問題は質問の内容ではない。パラダイムシフトの時代、質問の内容ではなく、それぞれの「私」と

「個」に質問するプロセスそれ自体を考えるべきであろう。そのプロセスこそ、人文学として「私」と「個」が共に創っていくこれからの大きな物語になると思われる。

シンポジウム「比較文化と共創社会」
人文社会科学部棟 103 教室
10:10～11:40

日台文化共創の一事例：
「百年の旅びと——佐藤春夫 1920 台湾旅行文学展」について
邱若山
(台湾静宜大学教授)

2020 年 4 月 3 日～11 月 29 日の予定で台湾の台南にある国立台湾文学館に於いて「百年の旅びと 佐藤春夫 1920 台湾旅行文学展」(【百年之遇 佐藤春夫 1920 台湾旅行文学展】)が行われていた。

百年前、大正九年に当たる 1920 年に、前年『田園の憂鬱』を掲げて文壇に登場した数え年 29 歳の佐藤春夫が、恋にやつれ神経衰弱で新宮帰郷の際、旧友東熙市に誘われたままに、一夏を台湾の旅で過ごした。対岸地方たる中国福建の厦門、漳州あたりまで足を伸ばしたこの旅行の見聞に基づいて、春夫はその後、沢山の作品を物した。『南方紀行』、そして『霧社』の結集に収められている「女誠扇綺譚」を初めとする諸々の傑作は百年前の台湾、福建南方の事情、風景を活写していて、今日に於いて、掛替えのない価値を持つ文学作品として高く再評価されている。特に百年前の台湾の姿や殖民地治下の真実を如実かつ深刻に記述した佐藤春夫の台湾旅行関係作品は台湾文学の大きな遺産となり、今日の台湾の学界で珍重され研究されていて、そのアダプテーションとしての創作まで現れている。

この文学展は実践女子大学河野龍也氏が中心になって企画したイベントであり、長年、佐藤春夫研究に携わり、かつて佐藤春夫の台湾関係全作品の中文翻訳書『佐藤春夫 殖民地の旅』を台湾で出版し、『南方紀行』、『佐藤春夫詩集』の翻訳を文学雑誌で連載し、台湾の殖民地時代の文学研究に一役を買った筆者は、顧問としてこの文学展に参画した。文学展はコロナ禍の影響で 2021 年 2 月 28 日まで延長し、11 か月間と長く行われ、大きな反響を呼んだ。

今度のパネルで、比較文化における**共創**に重点を置き、上記の文学展の準備、開催、展示などに際して、新宮市、佐藤春夫記念館との連携、協働を紹介し、文学展実現までの経緯、関係事項、文学展の実況、それが齎した成果を詳しく述べる。と同時に、佐藤春夫の台湾旅行及びその関係作品についての研究の最近の達成、議論の課題をめぐって述べていく所存である。

シンポジウム「比較文化と共創社会」
人文社会科学部棟 103 教室
10:10～11:40

「デジタル・ラーニング・パートナーズ・プロジェクト」について

黄翠娥

(台湾日本語教育学会監事・輔仁大学日本語文学科教授)

SDGsには 01「貧困を根絶」、04「非差別、公平、高品質の教育の確保」、10「国内の不平等の是正」がある。これらグローバル目標を如何に国別、さらには国内の地方へ向けて共創社会を構築するには上流から下流への「声かけ」運動が基本であろう。ここでは台湾の世代間での事例を紹介しよう。

2006年輔仁大学に大学生ボランティアによる僻地の先住民学童への学習支援を目的とした「地方ケアセンター」が設立された。折下台湾の教育部が台湾全土の教育資源の均等化を目指すデジタル学習プロジェクトを立ち上げた。これを受け、輔仁大学は同センターを中心に2007年よりプロジェクトリーダーとして、他の大学の相談役を委託されることになった。現在25の大学と遠隔地の100以上の小中学校(数校の高校を含む)が参加している。

活動内容は、大学生が学童に基礎科目と英語(日本語などの外国語やプログラミングやロボット設計などの選択も可能)をオンラインで教えるというものである。輔仁大学では、現在毎学期400人以上の大学生が地方に住む200人ぐらいの学童にサービスを提供していて、週に2回放課後にコンピュータ教室で、大学生によるマンツーマンの個別指導を受けている。

本来基礎学力カウンセリングが目的だが、地方の教師とは指導方法も内容も異なり、実際は地方学童の学習上の悩みの相談役や生活指導など、学童の鼓舞が第一の使命となっている。また未来を担う学童への海外文化の導入も重んじられている。輔仁大学では外国語学部(英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、日本語、イタリア語)の6学科が共同で構築した文化データベースを提供することによって、地方の学童の国際観の育成に一躍かっている。さらに毎年夏・冬の休みには合宿も開催され、地方の学童が都会に来て都会の文化を体験したり、大学生が地方を訪れ地方の学童と一緒に地方の文化を体験するプロジェクトも行われている。最近では大学生ボランティアの中には、原住民文化の研究に着手する者も出るようになった。大学生と学童との世代を超えた融合の成果ではなかろうか。

このような教育活動を通じて、台湾の教育部と輔仁大学は、具体的には以下の5つの共創社会の実現に努力している。1.地方に教育格差是正の情報や資源を提供。2.台湾の多様文化共有。3.外国文化による国際感の育成、4.原住民自身による自己文化の価値の向上。5.大学生と遠隔地コミュニティとの交流。これらはSDGsの目標に近づく活動に繋がると確信している。

ポストコロナ時代におけるグローバル人材の育成

董 莊敬

(台湾応用日本語学会理事長・文藻外語大学ヨーロッパ・アジア語文学部学部長)

新型コロナウイルスの感染症が引き起こしたパンデミックの影響により、感染者数及び死亡者数が増加している。その影響は、われわれの生活様式にも多大な変貌をもたらしただけでなく、国家経済にも深刻な影響を与えている。それと同時に、パンデミックの長期化により、従来の教育の在り方も否応なく変化させられてきた。学校の閉鎖で空間の限界を超えた遠隔授業が、従来の授業方式に取って代わり、同期型・非同期型のオンライン授業が教育現場において強制的に導入されるようになった。また、企業側は従来の勤務方法を改め、人と人との接触を極力控えさせるために、遠隔会議や在宅勤務を導入するようになった。さらに学生の採用活動に関しても、オンライン説明会やオンライン面接などの採用方法も実施するようになった。パンデミックはわれわれの社会や生活様式に大きな変貌を及ぼし、われわれに未曾有な事態を与えただけではなく、もはや従来の生活パターンに回帰できなくなってしまった。このような非日常的な事態は、今後ニューノーマル(New Normal)な事態になってしまうことは間違いないであろう。

このような大きな変貌のなか、より注目されていることは在宅勤務や遠隔会議による勤務方法の変化で、国境を超えて勤務をすることが従来より可能となり、グローバル人材の争奪戦がより過熱化していくことである。第4次産業革命では、グローバル化やIT産業の急激な発展、個々人の価値観の変化のなか、こうした社会変化に応じたグローバル人材のニーズが高等教育の人材育成策に関心が高まり、高等教育機関にそのような人材育成をすることを求めるようになった。本報告では、国際化、グローバル化に適応できるグローバル人材の育成について、台湾における「2030年バイリンガル国家政策発展計画」の実施及びその課題を取り上げ、報告する。

2030年バイリンガル国家政策発展計画の主な内容は、国民の英語の聞くこと、話すこと、書くこと、読むことの英語力を全面的に引き上げ、身につけた英語を用いて、よりよい仕事に就くことにより、国家の競争力を高め、経済発展を向上させることが狙いである。その骨子では、(1)生徒・学生の英語能力を全体的に底上げすること、(2)一定の割合のEMIが実施されることの2点に力点が置かれている。

2030年バイリンガル国家政策発展計画を受けて、台湾の教育部は、「高等教育学校の学生バイリンガル化学習計画の重点育成大学・学部」(大専校院學生雙語化學習計畫精進成為重點培育學院)を推進している。重点育成大学は、全大学中の18校の申請から、国立中山大学、国立成功大学、国立台湾大学、国立台湾師範大学の4校が選出された。一方、重点育成学部は、全大学中の35校76学部の申請から、システム及び応用科学領域が11学部、社会科学領域(マネジメント領域を含む)22学部、生物及び医学農学領域が6学部、人文及び芸術学領域が2学部、計25校の41学部が選定された。これらの領域は、国家重点産業領域における英語による科目学修のバイリンガルの専門人材の育成を目標としている。

「高等教育学校の学生バイリンガル化学習計画の重点育成大学・学部」計画目標において、2024年に重点育成大学・学部は、大学二年次の学生の25%が、英語能力のCEFRB2以上に達していることを目指し、大学二年次、大学院一年次の学生の20%が、英語による科目履修の単位

数のうち、EMI で実施された授業が 20%以上であることを目標に掲げている。ここでの EMI とは、English as a Medium of Instruction, EMI(以下、EMI と称す)であり、英語を媒介言語とする専門教育のことを指す。さらに 2030 年には、大学二年次の学生の 50%が英語能力を示す CEFRB2 以上に達していること。それと同時に、大学二年次、大学院一年次の 50%の学生は英語による科目履修の単位数のうち、50%以上の授業が EMI でなされたものであることを想定している。

2030 年バイリンガル国家政策発展計画の実施にあたっては、高等教育の果たすべき役割が非常に重要である。当該計画の実施例として、(1)大学における英語教育の改善・充実、(2)外国人留学生の受け入れの拡大、(3)教員の英語能力の向上と教員の育成、(4)EMI 開講の単位数や科目数の増加などが挙げられる。この計画は 2021 年 9 月から導入、および実施されたため、学生の英語力向上や学校への影響など、どのような効果があるのかは未知数である。また、どのように EMI で実施された授業を評価するべきかといったより具体的な課題設定が明確ではないため、今後、台湾の大学で実施されている EMI の動向を注視していきたい。

日本人初級英語学習者のコミュニケーション能力の伸長を目指した
英語ディベート「シンプル・ディベート」の実践研究
——オンライン授業での授業実践を通して——
橋尾晋平(名古屋外国語大学言語教育開発センター外国語担当専任講師)

現行の大学英語教育において、習熟度に関わらず実践的なコミュニケーション活動を実施し、学生のコミュニケーション能力を向上させる要請が高まってきており、特に日本人初級英語学習者のクラスにおいて、どのようにスピーチやプレゼンテーション、ディベートなどのスピーキング活動を行うかが、大学英語教育における課題の一つになっている。一方で、世界的な新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大によって、2020年度以降、大学英語教育では、オンライン授業およびオンライン授業を前提とした指導法の開発への需要が急速に高まってきている。

発表者は、日本人初級英語学習者が特定のテーマについて自分の意見や他の学生の意見に対する反対意見を簡単に述べる活動である「シンプル・ディベート」という英語ディベートを提案したが、本発表では、シンプル・ディベートの活動を日本人初級英語学習者の大学生のクラスにおいて実施し、コミュニケーション能力の下位能力である文法能力・社会言語学的能力・談話能力・方略的能力がどの程度伸長するかを分析する。また、今回の授業実践は、発表者が2020年度に担当した大学1年生のスピーキングのクラスで実施しているが、先述の新型コロナウイルス感染症の影響で、Google Meetを使用したオンラインのクラスで実践した。

本発表では、学生が実際にシンプル・ディベートを行っている動画と学生のディベートにおけるスピーチ原稿の一部を紹介しつつ、学期末に実施したシンプル・ディベートの活動に関する振り返りアンケートの結果を分析する。このアンケートは、9問の選択式質問と3問の自由記述式質問から構成されており、これらの選択式質問を通して、コミュニケーション能力の4つの下位能力が伸長できたかどうかを検討する。また、自由記述式質問の回答をテキストマイニングの手法を用いて分析し、ディベートの議論やスピーチに関する学習効果や今後の課題を明らかにする。

その結果、Google Meetを用いたシンプル・ディベートの授業を取り入れた授業では、オンライン授業による制約は生じるものの、ディベートの準備の過程から実際のディベートの活動までの日本語・英語によるさまざまな学生同士のやり取りを成立させることができたと結論づける。また、シンプル・ディベートの学習効果として、社会言語学的能力に関しては目立った伸長は見られないが、学生自身が文法能力・談話能力・方略的能力の向上を実感しており、シンプル・ディベートは、日本人初級英語学習者の社会言語学的能力を除いたコミュニケーション能力の伸長に寄与すると主張する。

COIL (Collaborative Online International Learning) を利用した異文化交流の試み
東本裕子(横浜商科大学准教授)

本発表は、コロナ禍で海外渡航、国際交流が制限される中で、異文化理解と英語コミュニケーションを研究テーマとするゼミに所属する学生が、COIL(Collaborative Online International Learning)と呼ばれるオンライン上の同期型協働学習を通して、様々な国の学生と交流を試みた実践報告である。

実際に対面で会ったことがない相手とオンラインで協働学習を行う緊張感を少しでも緩和させるため、交流相手は海外で日本語を学習中で、且つ英語の能力も比較的高い学生とし、交流言語を英語と日本語の両言語と設定した。また、事前に交流相手の専攻や興味、関心を知ることで、相手とスムーズに交流が進められるよう、互いの学生の情報を教員間で交換し、ブレイクアウトルーム等でペアとなる学生に交流相手の情報を伝えた。合わせて単なる楽しい交流で終えず協働学習として相互の学びを深めるために、非同期型のプロジェクトと研究発表も並行して実施し、双方の学生にとって自分たちのプロジェクトを学習言語で発表する機会としても活用した。

今回、交流を依頼したのは、台湾の致理科技大学、アメリカのピッツバーグ大学ブラッドフォード校(University of Pittsburgh at Bradford)、韓国の建国大学、極東大学、中国の河北工業大学の、4カ国5大学である。台湾、韓国、中国の学生の日本語能力は総じて非常に高く、ゼミの学生にとって「外国語を話せる」と海外の学生達が言う際のレベルと意識の高さを目の当たりにし、ショックを受けると共に発奮させられる良い機会となった。アメリカの学生は、日本語自体ではなく日本文化の講座を履修している学生ということもあり、日本語能力は初級であったため、ゼミ生は英語力を駆使し、実際に自分の英語がどの程度通じ、また通じないかを実感できる有難い機会となった。

これらの経験を通し、ゼミ生たちに見られた変化としては、これまで直接知り得る機会がなかった各国の文化や情勢に興味が生じたこと、また海外の学生の様子、特にコロナ禍での苦労や努力を知ることにより自分たちのみが大変な思いをしている訳ではないことがわかり克己心が生まれたこと、更に最も顕著な変化としては、英語を実際のコミュニケーションのツールとして認識し、実践的な学習を自主的に始めたことが挙げられる。また、ゼミ生をはじめ今回の海外のいずれの交流校の学生も、次回のCOIL交流とコロナ収束後の対面交流を強く希望していることも本交流が多くの学生に及ぼした意識的変化の成果として挙げられる。ゼミ生達はCOIL授業の後も自発的に交流を継続しており、海外に向けた意識や英語との接点が日常的なものとなりつつある変化が見られる。今回のCOIL交流の次なるステップとして、共同研究の提案を頂き、コロナ収束後に繋がるゼミ生共通の目標ができたことも有難い収穫となった。

研究発表
第1室(人文社会科学部 1号館 201 教室)
1部 13:00-14:30

オンライン授業による英文ライティング指導の可能性
白須洋子(サイバー大学准教授)

本発表は日本の大学におけるオンライン授業における英文ライティング指導の実践報告となる。

1. 研究の背景

従来大学英語教育において英語 4 技能の習得が求められており、なかでも英文ライティングの力は現代の学生には必携の技能になってきており大学英語教育の中で重要な位置を占めていると言えよう。しかし、英文ライティングを一文の和文英訳ではなく、筆者の考えを含んだある程度の長さの分量の文のまとまりと定義したとき、その指導は対面授業であっても簡単ではなく、効果的な指導方法を模索をすることは意義深い。

一方、コロナウイルス伝播後、日本の大学教育はオンライン授業の普及という意味で大きな転換期を迎えたと言える。ウイルスの蔓延を防止するため、急遽オンライン授業を強いられた大学は多く、その結果、新たな授業形態が発展を遂げ、また定着しつつある。教科の中でもとりわけ英語などの語学において、教員と学生、また学生同士が異なる場所にいるがらの授業は、対面授業でのインタラクティブな授業展開が制限され、指導には困難が起こると同時に様々な工夫創意がなされたことが想像できる。そのような時代背景のもと、オンラインによる効果的な英語指導や英文ライティング指導法の確立は急務と言えよう。

2. 研究方法と目的

本発表において、発表者は、LMSを使用した英文ライティングの学生への指導、出題、採点など具体的な指導法の実践報告をする。従来の対面式授業によるライティング指導とオンライン授業によるライティング指導を成果物のエラーを性質ごとに分類および分析をして成果物の品質を測ることでオンラインによるライティング指導の妥当性を検証する。本格的なオンライン教育の時代が到来した中で、オンライン授業による英語教育の可能性を論じたい。

「V + 切る」における前項動詞の限界性の弱化
——「勝ち切る」「決め切る」を例に——
河内健志 (高崎経済大学非常勤講師)

日本語の動詞+動詞型の複合動詞は、『古事記』、『万葉集』にも確認できるほど古くから存在している。日本語の歴史の中で、複合動詞は一連の事象を表現することから始まり、動詞間の意味を一体化し、形態的な緊密性を獲得してきた(金田一 1953、青木 2013 など)。そして、現代において日本語複合動詞は影山(2013)によれば「数と種類において他の言語を凌駕しているように見える」と述べられるほど生産性が非常に高いと言える。

さらに、SNS やインターネット環境が発達・普及している現代では、新たに創られた複合動詞が発信、使用され瞬く間に広がることも想像に難くない。しかし、その中には違和感を覚える、いわゆる「へんな日本語」複合動詞も少なからず存在する。

本発表では、近年 SNS、インターネット上、新聞、ニュース等で年々見聞きする機会が多くなってきている複合動詞「勝ち切る」「決め切る」を取り上げる。

最初にこれらの複合動詞の SNS、インターネット上での使用実態(使用時期、使用ジャンル、使用数)を明らかにし、年々使用数が増加していることを確認する。

これらの複合動詞に違和感を覚える人もいるが、その誘因は、前項動詞である「勝つ」「決める」は動詞のアスペクト性による分類(金田一 1950)では瞬間動詞に分類され限界性を有する動詞でありながら、動詞からアスペクト的機能範疇(助動詞)へと文法化した後項動詞「切る」により限界性を加えられることによって、限界性が重複することであると考えられる。

しかし、これらの複合動詞の使用は年々増加し、違和感を持たない人も多くなっていることも事実であるが、なぜこのような表現が可能になるのだろうか。

本発表では、これら複合動詞の前項動詞は日本語動詞で観察される限界性が弱化する、もしくは消失することによって、もはや限界性を有する瞬間動詞の地位を失い、後項動詞「切る」によって限界性を帯び、その結果複合語動詞として理論的に何ら矛盾することなく生成されることを示す。

参考文献

青木博史(2013)「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』東京: ひつじ書房

影山太郎(2013)「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』東京: ひつじ書房

金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』第 15 号[金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』5-26, 東京: むぎ書房 に再録]

GIGA スクール構想導入初期における中学校間の ICT 機器使用状況及び意識の差

斎藤隆枝(国際医療福祉大学助教)

河内健志(高崎経済大学非常勤講師)

高橋栄作(高崎経済大学教授)

文部科学省主導の「1人1台の情報端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備するGIGAスクール構想」が本格始動して2年近くが経過した。デジタルトランスフォーメーション(DX)化の恩恵を存分に受けることになる現中学3年生は2025年には大学に進学する。端末機器を自在に操作するスキルを十分に備えているであろう学生たちを迎え入れるにあたり、大学教育にも大きな変革が求められ、その備えとして現状把握が必要となる。本研究では、現在の中学生たちがICT機器をどのように使用し、またその使用に際してどのような意識を持っているのか、またそれらに学校間格差は存在するのか否かを明らかにするため調査を行った。

本研究では、関東地方北部に位置する中核市の市立中学2校の生徒(2~3年生)にご協力いただき、アンケート調査を実施した。アンケートでは学習目的及び学習目的以外の1日当たりのICT機器の使用状況、ICT機器操作スキル、ICT機器を利活用した授業に対する意欲、他生徒との協働スキル等を測るための質問項目計28問を設定した。実際の調査ではGoogle formを使用したオンラインアンケート形式を取り、生徒は配布されたQRコードから自身の端末を利用して回答し、最終的に生徒154名から有効回答を得た。

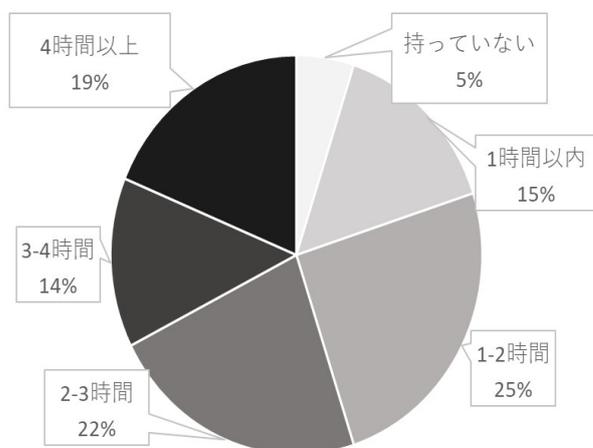


図1. 一日当たり学習目的以外のICT機器利用時間(中学校B)

結果、都市部に位置する中学校Aと郊外(縁辺部)に位置する中学校Bではほとんどの変数で有意差が見られた。学習目的でのICT機器使用時間では学校間の差は見られなかったものの、学習目的以外でのICT機器使用時間は中学校Bが有意に多かった(図1)。一方でICT機器操作スキル、ICT機器を利活用した授業に対する意欲、ICT機器利用による他生徒との協働スキルなどでは中学校Aが有意に高かった。始動したばかりのGIGAスクール構想ではあるが、今回の調査によりICT機器使用状況にも、操作

スキルやその利活用に対する意識にも、学校の特色に準じた差が既にあることが明らかになった。今後、高校や高等教育機関においてDX化した授業を効率的に運営するためにも、初等中等教育における学校間格差を最小限に抑えるための授業設計、サポート体制の構築などが急務になると言える。

教育 DX の先にあるもの
高橋栄作 (高崎経済大学地域政策学部教授)

スマートフォンなどのデジタル端末は、現在、多くの人の必携アイテムとなり、インターネットであらゆるものが容易につながる。人工知能が生活のあらゆる側面に利用され世界が大きな転換期にある。その中で鍵となる概念の一つが Digital Transformation (以下 DX) である(平井編 2021)。教育の分野においても DX 化が導入され、新型コロナウイルス感染症で混乱した教育現場への対応が迫られるのと同時に GIGA スクール構想(以下、GIGA)が加速され、2021 年度には多くの自治体で ICT 機器整備が達成されたという(平井編 2021)。平井編 (2021)によれば、DX は大きく三つの段階に分けることができるという。第一段階は、Digitization であり、GIGA による端末やネットワークの準備がこの段階にあたる。第二段階は、Digitalization で、データのやり取りや共有をデジタルで行うことである。第三段階は、DX で、世界的規模でデジタル技術を用いてさまざまな知見や技術が相互に活用できるようになり、新たな変革をもたらすようになるという。教育現場では、導入された ICT 機器の効果的な利活用が模索されている。その運用においてたびたび参考とされるものに SAMR モデルがある(Puentedura (2010))。これは、三井(2014)によれば ICT 機器などを授業で利用する際に従来の教授方略や学習方略にどのような影響を与えるかを示す尺度であるという。Substitution(代替; 以下 S), Augmentation(増強; 以下 A), Modification(変容; 以下 M), Redefinition(再定義; 以下 R)と進につれて、教授手段などに影響を与えるという。平井編 (2021)による DX の段階と SAMR モデルと比較すると Digitization と S, Digitalization と A, DX と M・R が対応する。現段階は、GIGA は、Digitization と S の段階にあるが、stuDX style などの取り組みが行われているところから、時間の経過に伴い段階は進んで行くことが予想される。平井編 (2021)は、GIGA で想定していることは「クラウドをフル活用すること」だと言う。その結果、ICT による「つながる環境」で学習することが可能となり、データの共有、保存、蓄積などが可能となる。さまざまな知識や情報が共有されることで「これまでになかった」価値が生み出される。SAMR モデルでは、M の段階がこれに相当するが、この段階では、自己調整的な学習や個別最適化が可能となる。学習者の利用資源が増えるが、一方で負担が増えることが予測される。文部科学省(以下、文科省)の第 18 回 21 世紀出生児縦断調査の結果によると「休日による勉強時間」が増加し「親との会話時間が減少している」と言う。そこで、M の段階でこれまで以上に、ますます学習時間などが長くなることが想定される。学習者の負担が増え、DX 化による情報過多が予測される。教育 DX 化によって、このことが起こることを想定しているのかを文科省の「GIGA スクール構想に基づく 1 人 1 台端末の円滑な利活用に関する調査協力者会議」の議事録を自然言語処理で分析し、現時点でそれらの懸念を想定しているのか考察する。また、現時点で考えられる解決方法「学習単元を超えて先に進まない」なども示したい。

英語の「文法」と「語法」のはざまに関する一考察
——二重否定表現における言語使用の実態と言語規範の意識の不一致を手がかりにして——
上田太郎(同志社大学文化情報学研究科博士後期課程)
山内信幸(同志社大学教授)

本発表は、英語母語話者と非母語話者における英語の二重否定表現について、言語使用の実態と言語規範の意識の乖離に着目し、コーパスを使って言語事実としての言語使用の実態を指摘する一方で、従来の文法書の記述に見られる言語規範の意識との乖離について、分析・考察を行う。

まず、「規則」として存在する規範としての「文法」と「慣用」として広く流布する言語使用の実態が必ずしも一致していない現状に鑑み、英語の二重否定表現における3つの課題を指摘できる。1つ目は、定評のある文法書においてさえ、二重否定を正用法とするものと誤用法とするものの双方が存在することが挙げられる。これは、依拠すべき「判断基準」が混在していることを意味している。2つ目は、二重否定を正用法としている文法書の解釈と現代英語を話す母国語話者の認識が一致していないこと、言い換えれば、乖離していることが挙げられる。二重否定を文法上正しいとする英語の文法書は「二重否定＝肯定」としている一方で、現代英語を話す母国語話者は二重否定の意味は全般的には否定の強調もしくは通常の否定と認識していることが挙げられる。3つ目は、日本の英語教育の実態における当該表現の位置づけを再確認することである。上述の通り、英語の二重否定に対する文法上・語法上の曖昧な解釈は、学習現場に混乱をもたらすだけでなく、英語が世界共通語としての性格を帯びていることにより、英語の位置づけを再検討する好機と捉えることができる。

二重否定を文法上正用とする現代の文法書として、例えば、Foley & Hall(2003: 89)では、「二重否定は肯定を表す」と説明している。そのため、この文法書は、英語規範文法において、論理学を基にした二重否定を肯定と認識する考えの基礎となった Lowth(1762)の著作を踏襲していると考えられる。そもそも古英語では否定辞を重ねて否定の意味を表すことが通例であったことに鑑みると、二重否定の形式そのものを文法上正しいとする解釈自体が、Lowth(1762)の影響を受けたと考えられる。一方で、後続の大半の英語の文法書で二重否定を文法上の間違いとする説明と実際の使用事態とが根本的に相反するものとなっている。ここには、看過しがたい言語使用の実態と言語規範の不一致や乖離が存在していることになる。例えば、Foley & Hall(2003: 89)の例では、“I don’t know nothing about Etruscan history.”を“I know a little about it.”、つまり、「私はエトルリア人の歴史を少し知っている。」のような肯定文としての意味を与えている語法上の解釈が、概して、二重否定は否定の強調と捉える多くの現代英語母語話者の認識とは異なっている事実を指摘することができる。

本発表では、文法と語法のはざまの現象として、言語使用および言語意識の不一致あるいは乖離について、英語の二重否定表現の諸相に着目し、これらの表現に関する文法的解釈の曖昧さや矛盾が、英語母語話者や非英語母語話者の意味解釈の揺れの原因となっていると主張する。

参考文献

- Foley, M., & Hall, D. (2003). *Longman Advanced Learner's Grammar: A self-study reference & practice book with answers*. Essex, England: Pearson Education Limited.
- Lowth, R. (1762). *A Short Introduction to English Grammar with Critical Notes*. London: A Millar R J Dodsley.

中上級日本語学習者の日本文化理解と母語の転移に関する一考察
——「民話」を素材とした課題文における視覚イメージの分析——

佐古恵里香(京都精華大学非常勤講師)

山内信幸(同志社大学教授)

中間言語に関する著者らの一連の研究として、著者らは、日本語学習者が描いたイラストに現出したイメージを視覚情報として、音声・語彙・文法などの言語情報と組み合わせ、多角的な視点から分析することで、第二言語学習者の中間言語の体系に関与している多元的要因の解明を目指す試みの実証的な検討を重ねてきている。現状では、イメージを学習者の中間言語の体系の一部に組み込んだ方法論は確立されておらず、著者らの一連の試みが、中間言語研究の全体像の解明の一助となることが期待されている。例えば、佐古(2021)では、村上春樹が2020年に著した短編小説「クリーム」を課題文として読ませながら、イラストを描かせること(ドローイング)で、現出したイメージから、学習者が心に抱くイメージにも化石化の現象が生じているのではないかとすることを指摘した。

本発表では、日本の地域固有のものとして伝承されてきた「民話」を素材に、学習者が描いたイラストに現出された視覚イメージを分析し、化石化や母語の転移が、具体的にどのようなイメージで中上級日本語学習者の心の中に内在し、言語理解としてどのように表出するのかについて考察することを目的としている。具体的には、日本の大学の学部へ留学をしている40名の中上級日本語学習者(中国語母語話者、韓国語母語話者、ノルウェー語母語話者)を対象に、学習者らが現在住んでいる京都市北部の地域で伝承されてきた「梅津の長者」という課題文の読解とドローイングを課し、イラストに現出されたイメージを分析する。特に、この課題文に登場する「えびすさま(七福神)」、「尼さん」、「貧乏な夫婦」などに現出したイメージの分析を通じて、読解において日本文化の理解が必要な領域について考察する。

結論として、学習者の母語の転移は、学習者が未知なものを補完する際に現れやすいことや学習者の母語の文化がイメージ形成に影響を与えていることを主張する。本発表の教育的意義としては、彼らが現在住んでいる地域の民話を通じて、地域への関心や理解が進むことが期待できることが挙げられる。この研究を通じて、中間言語の多元的要因の1つである言語転移の解明を通じて、中間言語研究の発展に貢献したいと考えている。

参考文献

佐古恵里香(2021)「村上春樹「クリーム」における〈逸脱〉の一考察:中上級日本語学習者の言語転移の観点から」『第10回村上春樹国際シンポジウム予稿集』pp.185-192.

いわゆる「itの特別用法」をめぐる再考察
山本茉莉(同志社大学文化情報学研究科博士前期課程)
山内信幸(同志社大学教授)

日本の英語教育において、従来の学校文法では、時間、天候、距離、明暗、温度、事情などを表す際、文の形式を整えるために、意味を持たない it が主語として立てられる(高梨, 1995)。これは、「itの特別用法」と呼ばれるもので、デクラーク(1994)などの欧米圏の英語文法書では、「虚辞の it」という枠組みの中で、「非人称の it」、「環境の it」、「場面の it」、「予備の it」などの呼称が与えられている。しかし、欧米圏の研究者間でも、it は語彙的な意味や指示物をもたないとする立場と、それとは逆に、it は、he、she、they などの人称代名詞と同様に、前方照応的に用いられる定名詞句表現であると主張する立場が存在する(デクラーク, 1994)。このように、it の特別用法は、it がもつ役割が不明瞭という問題を内包している。

本発表では、it の特別用法を取り上げ、代名詞がもつ照応機能の枠組みに基づき、後方照応の1つの用法として捉え直し、英文法記述の再構築を目指す。後方照応の用法と捉え直すことができれば、曖昧だった it の役割を明確にすることができ、また、英語学習者にとっては、より正確な読解力や適切な言語運用力を身に付けられることが期待できる。

先行研究として、前原(2017)は、天候、時間、距離などの主語の it は、話し手と聞き手の間に共有されている情報が存在していることを示し、その情報は述部以降で具体化されると考察している。先行研究では、単文を例として考察をしているが、本発表では、パラグラフ(談話)レベルに調査範囲を広げ、述部以降で生起する情報を観察・分析する。

対象データの中には、チャプター冒頭など、先行文脈がなくても、it が用いられる文が確認でき、これらの用例では、後続の文脈がそれぞれの内容(時間・距離・天候など)を含むものである。この観察結果より、「itの特別用法」は、代名詞が持つ照応機能の中の「後方照応」の一種と見なすことができる。ただし、ここでの it の用法は、単純な後方照応的な it というよりは、「これから以下の話題を提供する」というような「先取りの情報提供装置」の機能を持っていて、認知言語学の枠組みで言う「foregrounding(前景化)」のような役割を果たしていると仮定する。上記の主張を支持する根拠として、もし単純な代名詞としての後方照応であるのであれば、they として現れる可能性もあるが、“It is A.”の形式でのみ現れるという言語事実に鑑みると、一種の「話題提供としての舞台装置」と捉え直すことができると主張する。

参考文献

- 高梨健吉. (1995).『総解英文法』京都:美誠社.
デクラーク, レナート. (1994).『現代英文法総論』安井稔訳. 東京:開拓社.
前原由幸. (2017).「状況の it」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報人文編』23, pp.133-144.

魯迅の『狂人日記』の翻訳に関する一考察
王子涵(同志社大学文化情報学研究科博士後期課程)
山内信幸(同志社大学教授)

魯迅は中国の偉大な作家であり、その作品は国内外の学者に何度も翻訳されてきた。本発表で扱う『狂人日記』は1918年に書かれた小説で、中国現代文学史上初の白話文小説で、封建礼教に対する反抗を表現し、強い現実的な批判性を持っているものである。『狂人日記』の翻訳研究は、魯迅作品のより深い理解を可能にするものと期待できる。

本発表で扱う翻訳家として、井上紅梅は、魯迅の小説を全面的に紹介した最初の日本の翻訳家である[1]。増田渉、佐藤春夫共訳の『魯迅選集』は、日本における本格的な魯迅文学の紹介の始まりである[2]。竹内好は、魯迅研究の第一人者である。駒田信二は、中国文学を研究する有名な翻訳家である[4]。藤井省三は、その翻訳本では、竹内を代表する受容化の翻訳方略に挑戦している[5:612]。

『狂人日記』には、人名、官名、伝統活動など、中国の伝統文化の色を帯びた専有名詞がたくさんあり、これらは各訳本に具現されている。例えば、「趙という金持ちのおじいさんのこと」を意味する「趙貴翁」は人名ではなく、身分の呼称である。その他、多くの登場人物が設定されている。小説の中の人物の名前と称述は作家の丹念な加工を経て創作されたもので、それらは人物の個性と運命の体現であり、人物関係と社会地位の重要な体現でもある。翻訳者によって採用された翻訳方略が異なり、中国の伝統文化の色を帯びた専有名詞に対して異なると同時に、それぞれの特色のある異なる翻訳本が上梓された。

以上の背景を踏まえ、本発表では、ローレンス・ヴェヌティ(Lawrence Venuti)の受容化と異質化の考えに基づき、『狂人日記』にある中国の伝統文化の色を帯びた専有名詞を研究対象とし、竹内好、藤井省三、駒田信二、増田渉と井上紅梅の翻訳本を比較・考察する。「受容化」は「流暢な」、「読みやすい」目標のテキストが得られるよう、できるだけ翻訳文を現地化する翻訳策略である[3:44]。「異質化」は原文の異質性を保存する翻訳策略である[3:59]。もちろん、翻訳者が1つの翻訳策略だけを使うことはできないが、翻訳者の生活背景と翻訳目的の影響で、翻訳文に受容化あるいは異質化の傾向が避けられないことは否定できない。本発表では、5つの訳本における中国の伝統文化の色を帯びた専有名詞の翻訳傾向とその理由を考察し、井上紅梅と竹内好の翻訳本は、他の訳本より受容化した翻訳方略を応用する傾向が高いことを主張する。

【参考文献】

- [1] 袁荻涌. 1994. 日本对鲁迅作品的译介和研究[J]. 日本学刊, (03):109-118.
- [2] 林叢. 1991. 竹内好と魯迅[J]. 比較文学, (34):151-164.
- [3] Shuttleworth, Mark. 1997. *Dictionary of Translation Studies*. [M]. Routledge.
- [4] 方香兰. 2013. 浅析駒田信二《藤野先生》译文[J]. 牡丹江大学学报, 22(05):70-72.
- [5] 藤井省三. 2013. 故郷／阿Q正伝. [M]. 光文社電子書店.

北朝鮮怪獣映画『プルガサリ』をめぐる一試論
——ナショナルな想像力とテキストの余白を中心に——
李恵慶(大阪経済法科大学客員研究員)

本発表の主な目的は、北朝鮮の怪獣映画『プルガサリ』(英題:Pulgasari、邦題:『プルガサリ 伝説の大怪獣』)のもつ映画史的意義を、金正日の映画芸術論を踏まえて検討しながら、一貫性のある完結した物語に回収され(え)ないテキストの様々なずれや余白に焦点を当てて映画を読み直すことである。なかでも特にプルガサリという神話的身体によって創造されたナショナルな想像力がどのように具象化され、プロパガンダに利用されながらもまたそれを揺るがし変容させているのかを浮き彫りにする。

『プルガサリ』は1985年に完成された作品で、当初は世界公開を目指していたが、監督が亡命するなどの政治的な理由で未公開になっていた。しかし1998年に日本で、そして2000年に韓国で公開され、今や世界的に北朝鮮映画を代表する作品の一つとして知られている。映画のタイトルとなった「プルガサリ(不可殺)」は、高麗時代(918年～1392年)末期から朝鮮半島に伝わる伝説上の動物で、鉄を食い、悪夢と邪気を払うとされる一方で、それゆえにかえって町を壊し、人に害をも与える両義的な存在である。同名の映画でもプルガサリをめぐる物語構造や根源的な両義性がそのまま反復され、時代劇のなかに怪獣のプルガサリが登場する特撮作品となっている。

とりわけ、この映画をめぐる注目に値するのが金正日との関係性である。「わたしは政治家でなかたったら、映画監督になっていた」と公言するほど、映画好きで知られていた彼が自らプロデュースしたとされたのがこの映画であり、それゆえ、彼が、確立していた「チョンジャ(種子)芸術論」という独自のチュチェ芸術論を垣間見ることができる貴重な作品となっている。

しかももうひとつ特徴的なのが、この映画が北朝鮮・日本・韓国によって製作された合作映画という側面を併せ持つという点である。中野昭慶やスーツアクターの薩摩剣八郎など、ゴジラシリーズを手掛けていた東宝特撮チームが特撮技法を担当していたことや、北朝鮮に拉致され、金正日の全面的な支援のなかで多くの映画製作に携わっていた韓国のシン・サンオク監督が亡命する直前にメガポンを取った作品であることは広く知られているが、そうしたことがテキストにどのように影響していたのかについてこれまでまったく検討されてこなかった。

こうしたことを踏まえ、本発表では『プルガサリ』の映画史的意義を金正日のチュチェ芸術論から検討しながら、プルガサリという神話的世界がもたらすナショナルな想像力がどのように具象化され、どういった役割を果たしているのかを明らかにする。

太平洋戦争勃発における山本五十六の軍事戦略とハル・ノート
栢山剛(鳥羽商船高等専門学校准教授)

1941(昭和16)年12月8日、日本時間午前3時19分(ハワイ時間の12月7日午前7時49分)、第1次攻撃隊がハワイオアフ島にある米軍基地攻撃を開始し、続く午前3時22分には、攻撃隊長淵田美津雄中佐が「トラトラトラ」(「われ奇襲に成功せり」の意味)を発信する。第1次攻撃隊が停泊中の米軍戦艦群や地上基地の航空隊などに痛打を与えた後、第2次攻撃隊が殺到して、追い打ちをかけた。この山本五十六が計画した真珠湾攻撃は、戦略・作戦的には、米太平洋艦隊主力の撃破と南方作戦への介入阻止という目的を達成し、戦術的には極小の損害で最大の成果を得た。ちなみに、この真珠湾奇襲攻撃の訓練は、鹿児島県の錦江湾を中心に、鹿児島県内各地で行われていた。

一方、米国のF.D.ローズヴェルト大統領が真珠湾攻撃を行った日本の軍事作戦の情報を事前に知っていたにもかかわらず、静観していた目的は何だったのか。それは対アジア・太平洋ブロックに無関心に米国民に刺激を与えるための手段にすぎず、太平洋戦争が勃発した根底には中国要因が大きく絡んでいたのである。確かに、アメリカが伝統的孤立主義の立場から1930年代後半以降、中立法、武器貸与法などを経て、中国に対する援助やヨーロッパへ干渉するという国際主義の立場へ転換したことは、紛れもない事実であるが、果たしてアメリカがヨーロッパを重視していたのか、それとも中国を日本に対する「重要な盾」として重視していたのか議論の分かれるところでもある。

結局のところ、太平洋戦争は1941年11月26日、日本に対する最後通牒となった「ハル・ノート」が引き金となり、また、同年12月8日、日本軍の奇襲戦法であった真珠湾攻撃が原因で勃発した。以後の日米関係は、1945年8月15日、日本が「ポツダム宣言」を受諾し、無条件降伏するときまで、太平洋戦争を通じて大きく展開していくのである。

最後に、私が2020年度に鳥羽商船高専に赴任して驚いたことは、本校の大会議室に太平洋戦争中の日本海軍の最高司令官だった山本五十六(新潟県長岡市出身)の直筆の書画が掲げられていることであった。五十六と鳥羽地域とのかかわりについてはあまりよくわかっていないようであるが、折をみて、今後も山本五十六研究に詳細に触れてみたいと考えている。また、2021年は、太平洋戦争勃発の大きな要因となったハワイにおける旧日本軍の奇襲作戦、いわゆる『真珠湾攻撃』から80周年を迎えたため、日米政治外交史を再考察するいいタイミングでもあろう。

現代日本ファンタジーにおける異文化の商品化と文化の盗用の問題について
エスカンド・ジェシ(大阪大学大学院人文学研究科招聘研究員)

現代日本ポップカルチャーの中でも多メディアに亘るファンタジー・ジャンルの作品において、異文化の伝承、神話、宗教などから採択されたモチーフが数えきれないほど多く再利用されている。それらが如何に導入され、日本独自の形で内面化されたかについては、いくつかの先行研究で近年注目を集めており¹、その問題性が指摘された事例もある²。日本の創作者と消費者に内面化された異文化由来のモチーフを核とする当該ジャンルは、データベースファンタジーとして論じられてきた³。このような異文化理解に基づかない異文化受容は、文化の盗用の問題とも関係してくる。

データベースファンタジー作品における異文化由来のコンテンツ、とりわけ宗教的モチーフの取り入れ方は、共創学の理想から極めて離れた傾向を持っている。そして、そのような国産コンテンツのグローバルな流行が加速し続ける中で、文化の盗用であるとの異議申し立てもあり、国際問題になり始めている⁴。日本では文化の盗用が理論的にも殆ど未導入であり、社会現象としても、総じて日本人の関心は低いが、今後、コンプライアンスの観点から創作者や企業から注目されると考えられる。

その際に、不足している異文化理解を加えることで、問題に発展しかねない文化の盗用の恐れのある創作を共創に変えるチャンスになるだろう。本発表において、80年代から加速した異文化由来のモチーフを核とするデータベースファンタジー、とりわけ国産の課金系モバイルゲームにおける異文化の商品化を事例に、文化の盗用の問題を検証し、共創に変えるための是正措置を考える。

¹ Masaya Shimokusu, “An Anime Dullahan”, Kindle eBook, *The supernatural revamped: from timeworn legends to twenty-first-century chic*, Eds. Barbara Brodman and James E. Doan (Madison: Fairleigh Dickinson University Press, 2016), 132-43; エスカンド・ジェシ「カトブレパスの変貌: 日本ポップカルチャーにおける文化移転的変容の事例研究として」『比較文化研究』第145号 (2021年10月31日): 1-13; 大場昌子ほか(編)『ゴーレムの表象: ユダヤ文学・アニメ・映像』(東京: 南雲堂, 2013年).

² 伊達雅彦「ゴーレム表象の軌跡」『ゴーレムの表象: ユダヤ文学・アニメ・映像』(東京: 南雲堂, 2013年).

³ エスカンド・ジェシ「現代日本ファンタジー文芸作品におけるモチーフの文化移転: テーブルトップ・ロールプレイング・ゲーム(TRPG)の媒体としての役割を中心に」『社会文化研究』23 (2021年6月10日): 71-93.

⁴ 「ヒンドゥー教徒の政治家が『真・女神転生』に抗議—『神々や女神を悪魔として登場させることは冒瀆』」, Game*Spark, 参照 2022年2月2日, <https://www.gamespark.jp/article/2021/12/08/114173.html>.

横溝正史「面影双紙」論

黄如萍(台湾・国立高雄餐旅大學応用日語学科准教授)

横溝正史「面影双紙」は、昭和8年(1933年)、雑誌『新青年』1月号に発表された小説である。

本作はこれまでの研究史の中ではそれほど多くの注目を集めてきたものとは言えないが、その数少ない研究においては、主に他作品との関連の中で論じられてきた。この二つの作品の関係については、夙に江戸川乱歩が「一般文壇と探偵小説」(『宝石』昭和22年5月号)において「横溝君なども谷崎文学の心酔者であって、例えば、「鬼火」と「金と銀」、「面影双紙」と「ある少年の恐れ」、「蔵の中」と「呪はれた戯曲」等、その着想が酷似しているほどある」と谷崎潤一郎作品との類縁性を指摘しているのが代表的である。

以上のように、研究史ではそれをもとに、横溝正史と谷崎潤一郎との関係が論じられてきたものだと考えられる。横溝正史の創作行為では、谷崎潤一郎の作品を意識していると言えるのであるが、何故あえて谷崎潤一郎の作品でなければいけないのか。したがって横溝正史と谷崎潤一郎作品における摂取の問題について、いまだに考察の余地は大きい。本論では、横溝正史の「面影双紙」という小説全体の構造・仕組みを検討した上で、他作品との関係性や、そこから摂取した主題に注目して読み解いていきたい。論証方法としては、まず、「私」による語りの構造に着目し、本作品の仕組みを捉え直すことを試みる。続いて、同様の性格を持つ他作品と共通した要素を探りつつ、横溝正史における「面影双紙」の文学的位置を考えることとする。

物語世界に描かれた共創 コロナ禍の芥川賞文学を例に
石川隆男(臺灣大学兼任助理教授)

20世紀末まで、近代化、戦後の復興、成長期のグローバル化へと、社会・経済が発展したように、人々も組織や他の人と協働、多様化、共生へと相互関係を変化させてきた。本稿は、井庭崇の21世紀は創造社会の時代説を依拠とし、コロナ禍の文学作品にも新たに創造という行為の影響が及んでいることを探ることを目的とする。

新型コロナ(2019～現在)が現在進行形を継続するなか、最近100年前のスペイン風邪(1918～1920)の疫病文学が注目を浴びている。今のコロナ禍に生きる私たちにはリアル感があるだけでなく、当時の感染対策や人々の心理状態が参考になるからだという。この二つのパンデミックは、マクロ的には社会、経済、医療とウイルスの毒性の面で大きく異なっているとは言え、ミクロ的には予防策の外出規制、マスク、ソーシャル・ディスタンスなど様々な個々に対する社会制約は今も変わらない。では、こうした感染症予防策は、現代の人々に何をもちたらし、それを機縁に社会はどう変容しようとしているのだろうか。筆者は、そこには昨今各界で注目を浴びつつある「共創」という概念につながる脈絡が存在すると考える。コロナ禍2年目の2021年、165回芥川賞受賞の二つの作品『貝に続く場所にて』と『彼岸花の咲く島』に描かれた世界には、どちらも100年前のリアル社会の「場」での自己と相手の物語ではなく、バーチャル・リアリティー的に創造された「場」での自己と自己に内在する相手とが物語を紡いでいる。しかも、この創造された「場」は互いが築き共有する場所となっている。確かに創造社会の一端を見ることができると言えよう。

では、創造社会の「共創」とは何であろうか。これは2004年に米ミシガン大学ビジネススクールの二人の教授が提唱した概念で、「Co-Creation」の日本語訳であり国語辞書にもない新語である。彼らは「共創」をビジネスにおいて「これからの時代、顧客と一緒に価値を生みださなければ企業は競争に生き残れない」と説明している。これは、モノの創造(つくる)が新たに人々の関心事や生活や人生の軸になることを意味する。ここでのモノとは物だけではなく、システム、ルール、バーチャルなど範囲は広い。井庭崇は、1980年代まで人々は物の消費に価値を見出す消費社会に生きていた。それが、1990年代に情報を重視し互いのより良い関係を作る情報社会が始まった。そして、21世紀に入り不可視なものも含め自ら作り出す創造社会が始まったと主張する。この枠組みにおいてアメリカ生まれの「共創」も実は人間社会の変化に伴い自然発生した概念であることがわかる。

そこで、本稿の目的である文学への「共創」の影響を探るために2021年の165回芥川賞受賞作品石沢麻衣の『貝に続く場所にて』と李琴峰の『彼岸花が咲く島』を取り上げる。また、消費社会時代の作品として、与謝野晶子の評論「病床の床から」(1918.11)と「死の恐怖」(1920.1)、さらに菊池寛短編小説「マクス」(1920.7)を取り上げ当時の人々の内心の声も聞く。これにより「共創」が未来に開かれていることを確認したい。

研究発表
第3室(人文社会科学部1号館203教室)
2部 14:40-16:10

『平家物語』における白詩へのアリュージョンの英訳方策
風早悟史(山陽小野田市立山口東京理科大学講師)

唐代の詩人白居易の詩(白詩)は平安時代以降の日本文学に大きな影響を与えた。『源氏物語』の帝と桐壺更衣が「長恨歌」の玄宗皇帝と楊貴妃に重ね合わされていることはその代表例であるが、『平家物語』もまた、その語りに白居易の詩句を取り入れている。たとえば、近衛帝と死別した後、望まず二条帝の後にもなった藤原多子の哀しみを語る巻第一「二代后」において、多子が二条帝に「ひたすらあさまつりごとをすゝめ申させ給ふ」のは「長恨歌」へのアリュージョンである。「長恨歌」は巻第六「小督」でも引用されており、後白河法皇と亡き建春門院との絆の深さが「比翼の鳥」と「連理の枝」にたとえられている。「長恨歌」の他にも、安徳天皇と平家一門の菩提を弔うために出家する建礼門院の姿を描いた「女院出家」では、「上陽白髪人」からの引用が認められる。

本発表では、『平家物語』における白詩へのアリュージョンを拾い出して整理するとともに、それらがどのように英訳されてきたのかを分析する。アリュージョンに気づいた翻訳者は、ただ翻訳するだけではなく、それがアリュージョンであることを読者に教えるために本文に加筆することもできれば、別に注釈を設けて解説することもできる。そもそも訳さない、削除してしまうというのも一つの方策である。

『平家物語』には全訳と抄訳をあわせて複数の英訳が存在しているが、今回主な考察の対象とするのは、北川弘と Bruce T. Tsuchida による共同訳と、Helen Craig McCullough による訳である。前者は 1975 年に東京大学出版会から、後者は 1988 年にスタンフォード・ユニバーシティ・プレスから刊行された。どちらも、岩波書店の日本古典文学大系の一冊として刊行された高木市之助他校注の版(上巻は 1959 年、下巻は 1960 年刊行)を翻訳の底本としているので、他の英訳よりも細かく比較することが可能である。

環境文学の視点で読む村上春樹『東京奇譚集』
葉凌(淡江大学准教授)

村上春樹の『東京奇譚集』(2005年・新潮社)は、『新潮』2005年3月号～6月号に掲載された「偶然の旅人」、「ハナレイ・ベイ」、「どこであれそれが見つかりそうな場所で」、「日々移動する腎臓のかたちをした石」及び、書き下ろしの「品川猿」を収録した短編小説集である。作者である村上春樹が「作品のグループにそれなりの一貫性やつながり」を与える「都市生活者を巡る怪異譚」というテーマを設定したと述べている¹ように、各短編は「怪異譚」というキーワードによって繋がっているとされる。

重岡(2006)は各短編における「怪異譚」が「内なる小さな悪」に入る「導入部」だと論じている²。一方、堀口(2014)は「怪異譚」の他に各短編の共通点として「他者の声に耳を傾けること」を挙げている³。先行研究が示唆したように、「怪異譚」をはじめとして『東京奇譚集』に収録された五つの短編を貫くテーマは複数存在すると考えられる。

本稿では環境文学の視点で『東京奇譚集』の解説を試みようとする。なぜ環境文学を視点にするかという、村上春樹文学の研究に新たな視点を取り入れようとするからである。よく知られている村上春樹文学の研究テーマの一つである「都市」をキーワードとしてCiNiiで検索すると、42件の検索結果の中80年代の論文は25本で59.5%を示している⁴。この結果から分かるように、研究視点は常に変動している。自然環境と人間との対話や交流を中心とする「環境文学」は新型コロナウイルス、SDGsをよく目にする2022年に相応しい研究視点だと言えよう。

確かに『東京奇譚集』は決して自然環境を中心に描く作品ではない。しかし、「自分がこの島を受け入れなくてはならない」(「ハナレイ・ベイ」)、「風が私というものを理解します。同時に、私は風を理解します」(「日々移動する腎臓のかたちをした石」)とあるように、自然環境と人間との繋がりは作中における重要な表現だと思われる。以上のように、本稿は環境文学の視点を用いて村上春樹『東京奇譚集』を解説するものである。

1 村上春樹(2014)「まえがき」『女のいない男たち』文藝春秋 P.6

2 重岡徹(2006)「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』(48)別府大学 P.35

3 堀口真利子(2013)「村上春樹『東京奇譚集』における偶然性——「品川猿」の眠りと覚醒」『相模国文』(40)相模女子大学 P.84

4 CiNii「CiNii Articles - 日本の論文をさがす」<https://ci.nii.ac.jp>で「都市 村上春樹」をキーワードとして検索した結果である。(2022年1月28日閲覧)

AI技術のテキストマイニングによる村上春樹文学研究
——『神の子どもたちはみな踊る』を中心に——
曾秋桂(台湾淡江大学教授)

2019年末に新型コロナウイルスのパンデミックが爆発したため、いきなりオンライン、テレワークなどを強いられる現在、あらゆる分野に莫大な影響を与えているAI(Artificial Intelligence、人工知能)技術との協働も、避けて通れない重要課題の一つである。

その協働を強く意識した上で、発表者は近年、文学研究でよく使われたテキスト分析の方法とAIのテキストマイニング技術の応用方法との間を行き来する方法論的な補い合い・協働を目的に、多和田葉子の原発文学作品と、村田沙耶香『コンビニ人間』などのエコフェミニズム文学作品を対象に、AIのテキストマイニング技術を応用した研究成果を積み重ねてきている。一方、村上春樹の2010年代前後の『1Q84』、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』、『騎士団長殺し』、『一人称単数』などの作品も取り上げて考察した。この一連の実験的試行がAIとの方法論的な補い合い・協働は確かに文学研究において有効だと証明されたと言える。

今までAIのテキストマイニング技術を応用し日本文学作品を解析した結果を参照し、三点ほどの事柄が発見された。一点目は、『コンビニ人間』のような主役古倉、脇役の白羽の観点から正反対な二通りの読みが提示されたことである。また、多和田葉子、村田沙耶香、村上春樹の三人の作家の間で個人的言葉遣いの相違が第二点として挙げられる。最後に同じ作家でも通説で長編か短編と分類された複数の作品の間でも違いが見られるため、分類基準を再検討すべきだということである。このように、AIのテキストマイニング技術との方法論的な補い合い・協働を図った文学研究は一層多様化できる可能性がある。

今回は、今まで築いた研究成果を踏まえた上、上述の方針に従い、今まで取り扱った2010年以後の村上春樹の作品からさらに遡り、より明確に社会にコミットメントした形で創作したと言われた『神の子どもたちはみな踊る』(2000年、新潮社)を研究対象に考察することにする。AI技術の応用は、『神の子どもたちはみな踊る』全体のワードクラウド及び各品詞のワードクラウドの制作、LDA(トピックモデルによる統計的潜在意味解析、Latent Dirichlet Allocation)によるトピックモデル解析、Googleのオープンソースツールword2vecによる単語ベクトルの相関性の判明、共起ネットワークによるクラスター分析、AI技術を援用した感情スコア分析と感情変化分析¹を用いる。このように、AI技術の応用との協働を視野に入れて、共創社会要素からも『神の子どもたちはみな踊る』論をより総合的に構築していく所存である。

1 <https://qiita.com/yukinoi/items/46aa016d83bb0e64f598>(2022年1月22日閲覧)日本語評価極性辞書を利用したPython用Sentiment AnalysisライブラリOsetiを用いた。

研究発表
第4室(人文社会科学部1号館204教室)
1部 13:00-14:30

小規模単科医療系大学における初めての日米連携型 COIL 実践と課題
山本美津子(京都医療科学大学講師)

コロナ禍により実際の移動を伴う海外留学研修等の活動が停止となり、コロナ禍以前より行われていたオンラインツールを利用した異文化交流プロジェクトが現在世界中で盛んに行われている。日本の教育機関においても Zoom や Line 等を活用し海外と連携する様々な形の教育交流の機会提供が増加している。しかしながら、総合大学に比べ、小規模な単科医療系大学ではオンラインを活用した参加型国際教育実践の取り組みを展開するにはいくつかの難しい状況がある。

本発表は、その状況の中で英語担当教員のアクションにより一歩を踏み出した COIL (Collaborative Online International Learning) という ICT を活用したオンライン国際連携学習実践の概要と、実践により見えてきた可能性や課題についての報告である。今回はアメリカのアラスカ州立大学(アンカレッジ校)で日本語を教える教員との共同で行った実践である。日本語の授業を取っている3年生8人と、日本側は医療系専攻の1年生6人(学生有志)が対象となる。両校とも授業外のエクストラポイント枠でのプロジェクト活動であった。使用言語は互いに目標言語とした。活動期間は約2か月であり、双方の学生の主体的行動を前提とした、グループワーク協働型学習実践である。活動プロセスとしては、まず各自自己紹介の動画を提出し、その後に教員側で日本人学生が2人ずつ入る3つの班分けを行った。次に各グループが話し合いにより双方の文化比較に関する興味のあるトピックを決定した。そして最後に決定したトピックに関して双方がリサーチをして情報をまとめ、グローバルな一つのチームとしてグループメンバー協働で一つの動画を作り録画を提出することであった。提出の為にプラットフォームとして Google Drive を使用し、各班の活動には、ラインや zoom が用いられた。分析データは、成果物としての個人の自己紹介ビデオや、グループでの協働ビデオであり、他には活動参加理由記述、活動振り返り記述、そしてインタビュー内容である。

活動の結果としては、どのグループもオンライン交流のやり取りに際しコミュニケーショントラブルに見舞われた。また成果物の協働動画を提出出来なかったグループは3つのうち1つであった。しかしながら、短い交流期間であったにもかかわらず総じて学生たちは言語面、文化面、態度面に関する気づきを経験し学びを得たようである。ただ、交流に積極的な意思を持っていた参加者ではあったが、実際のコミュニケーションに際しては発話量も少なく受け身的であった。また同世代の英語話者との交流機会の提供であったにもかかわらず、プロジェクトに参加したのは1年生全体の6%程にすぎなかった。発表では初めての COIL 実践における取り組み概要と教育効果や課題、また参加者の言語データ詳細等からわかる小規模単科医療系大学におけるオンライン国際交流の課題について報告する。

研究発表
第4室(人文社会科学部1号館204教室)
1部 13:00-14:30

語学教員から見た第三期教育における多言語主義の現状と未来
——日本とスペインの比較研究——
ルツケル瀬本阿矢(立命館大学准教授)

本発表は、“Multilingualism in Third-Level Education in Japan and Spain: An Analysis of the Professional Prospects of Young Graduates”と題したプロジェクトの第一段階として行った研究の分析の結果を報告するものである。本プロジェクトは、スペインと日本における多言語教育への取り組みや意識をアンケート調査により比較検討するものであるが、その第一段階としての今回の研究では、大学の語学教員を対象に実施したアンケート調査の結果をもとに分析した。本アンケートは、学生のモチベーションや取り組みレベルについて、学部レベルの外国語教育に携わる専門家の経験に基づく認識を把握する目的で2019年12月から2020年1月にかけて実施した。今回の研究では、次の3つのリサーチ・クエスチョン、すなわち1)日本とスペインでは、語学教員として働く際に重視される資格やスキルにどのような方針がとられているのか、また方針の違いはあるのか、2)高等教育で言語教育が日本のように義務化されている国と、スペインのように義務化されていない国とでは、言語学習に対する学生のモチベーションにどのような違いがあるのか、そして、3)外国語学習の将来的な方向性について、両国は共通の認識を持っているかという点について分析を行った。その結果、日本とスペインでは、大学で言語学習が必修科目として取り入れられているかどうかという点で大きな違いがあり、それによって求められる学位やスキルも異なること、日本とスペインの言語学習システムに大きな違いがあるにもかかわらず、両国の教員は語学学習に対する学生のモチベーションが比較的高いと考えていること、また、学生が社会人になった後、将来的にはより多くの外国語を学ぶ必要があると両国の教員が考えていることが明らかとなった。このアンケート結果を受け、本プロジェクトの第二段階では、大学生の希望する職業への就職を支援するために、学部生を対象に職業と多言語習得の関係に対する意識調査を行うことを予定している。本プロジェクトを通して、第三期教育で必要とされる共通の目標、評価方法、そして教育的アプローチを持つ、外国語教育のコア・カリキュラムの開発の促進に寄与できると考える。

為政者の歴史的演説に対する印象評価に関する日中比較
橋本恵子(福岡工業大学短期大学部准教授)

本稿は、好ましいスピーチスタイルに関する参考資料の一つとして、為政者の歴史的演説を評定対象とし、中国人大学生(日本語学習者)と日本人短期大学生による印象評定結果を比較分析し、国によって好ましい演説の在り方に違いがあるのかどうかを検証するものである。またプレゼンテーションやスピーチコミュニケーション教育の際の、評価尺度を構築するための一助とすることを試みるものである。

本調査で使用した演説資料(音声データ)は、大隈重信の「憲政ニ於ケル輿論ノ勢力」である。本演説は、1915(大正4)年3月に、帝国議会の解散総選挙に向けて行われたものである。時の内閣総理大臣大隈重信77歳の時のもので、蓄音機に吹き込まれ、地方遊説の代わりに各地に回送されたものとされる。本演説を選択した理由として、107年前の大隈重信の声を聴くことが出来ることは、学生にとって貴重な体験であること、また、大隈重信が演説の神様とも称され、聴衆を魅了する演説に長けた人物であること、更に、遊説を目的とした一般市民向けになされた演説であることが挙げられる。

筆者はこれまで、日本人弁論者に対する印象評定を行い、プレゼンテーションに対する評価の観点を明らかにすることを試みてきた。スピーチの質の向上を図る上で、スピーチに対する評価の議論は欠かせない。その際、スピーチのどの要素を聴衆がいかに評価するのかを明らかにする必要がある。また、国によって評価の観点到違があるのかどうかを明らかにすることも重要な観点であると考え。

調査の結果、次の点が明らかとなった。日本人短期大学生を対象とした調査では、「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」の内、「活動性」が短期大生にとって、弁論の印象を左右する高い要素であることが明らかとなった。また、1回目調査平均値と2回目調査平均値の集計結果の伸び率から、文字起こし資料を提供したことにより最も影響を受けた項目は「上手さ」であった。さらに、20項目中19項目で、2回目調査結果の方が、評価が上がったのに対し、1項目「落ち着きのない—落ち着きのある」(速さ感)のみ、評価が下がった。

中国人大学生を対象とした調査では、「好悪」「上手さ」「速さ感」「活動性」「スタイル」の内、「活動性」「スタイル」が弁論の印象を左右する高い要素であることが明らかとなった。また、1回目調査の平均値と2回目調査の平均値の結果の伸び率から、文字起こし資料を提供したことにより最も影響を受けた項目は「好悪」「上手さ」であること、調査項目20項目中18項目で、2回目調査結果の方が、評価が上がったのに対し、2項目「遅い—速い」「落ち着きのない—落ち着きのある」(速さ感)のみ、評価が下がったこと等である。

日中同形語「進歩」の用法に関する日中コーパスからの一考察

松井一美(国際交流基金関西国際センター専門員)

平澤佳代(朝陽科技大学助理教授)

日本語には漢語由来の語彙が多く、中国語と同形のものも多い。日中同形語については、これまで数多くの研究が行われてきた。文化庁(1978)をはじめ、多くの先行研究で日中の意味の相違による分類や品詞性による分類を試みている。本研究では、日中同形語のなかから、「進歩」を取り上げ、コーパスを分析することにより、用法の検証を行う。

文化庁(1978)では、「進歩」を「日本語と中国語の意味が同じ」に分類しているが、日本語と中国語でまったく同じように使うことができるのであろうか。本研究では、「進歩」のコロケーション、特に「何が進歩する」のか、「進歩」の主体を日本語と中国語のそれぞれのコーパスから分析し、日中での用法の違いを検証する。

日本語のコーパスは、「現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ 中納言版」を使用した。当該のコーパスにおいて、文字列検索から「進歩」を検索し得られたデータを分析の対象とする。中国語のコーパスは、「中央研究院漢語平衡語料庫」(略称 Sinica Corpus)を使用し、「進歩」で検索したデータを分析対象とする。

日本語でも中国語でも「進歩」の主体は「科学技術」や「人類社会」「文明」に関するものがほとんどであり、共通している。しかし、中国語のコーパスには見られたが、日本語のコーパスには見られないものもあった。中国語では、「進歩」の主体として「戦績」「ランキング」「試験の成績」などが見られ、台湾教育部によるオンライン辞書でも「他的成績已有進歩(彼の成績はすでに進歩がみられる/進歩している)」という例文が掲載されているが、日本語のコーパスでは、「進歩」の主体が「成績」となっているものは見られない。中国語では、テストの点数が何点進歩した、ランキングが3位進歩したという言い方ができるが、日本語では「上がった」というほうが自然である。また、中国語では、上達した場合も「進歩」を使うが日本語では不自然に感じることがある。例えば、『みんなの日本語初級1』の繁体字版(台湾では版權を得て『大家的日本語初級I』『大家的日本語初級II』として普及)では、第19課例文6「日本語が上手になりましたね」の中国語訳を「你的日語進歩了呀」としているが、日本語で進歩を使うと不自然である。

以上のように、「進歩」の用法は、日中でほぼ同じであるが、「(点数が)上がる」や「上達する」に相当する意味の場合、日本語と中国語では用法に違いがあることが明らかとなった。

【参考文献】

『中国語と対応する漢語』文化庁(1978)大蔵省印刷局

『大家的日本語初級II』第2版(『みんなの日本語 初級1』繁体字版)(2015)大新書局

『大家的日本語初級II 文法解説・参考詞彙・課文中譯』第2版(2016)大新書局

空間移動パターンの「Vてくる」における視点分析
——中国語の移動表現“V来”との対照的観点から——

陳李(東北大学国際文化研究科博士後期課程)

上原聡(東北大学教授)

視点の概念を日本語学の分野に本格的に導入し、関連する文法項目を分析した代表的研究として、久野(1978)がある。久野は「発話当事者の視点ハイアラーキー」や「談話主題の視点ハイアラーキー」などの視点研究の原則を提案している。それ以降、日本語の視点研究が多数行われてきた。古賀(2018)は、「視点」研究の枠組み構築を試み、視点を考慮した上で「視点の意味合い」と「視点の決定のされ方」²の2点から、日本語の様々な個別の文法項目を分析した。その結果、「視点」は日本語の数多くの文法項目と密接な関係を有することを指摘し、文法研究における「視点」の必要性と有効性を主張している。本稿では、空間移動を表す「来る」の補助動詞表現「Vてくる」に着目し、中国語の“来”の補助動詞表現“V来”と比較することにより、人称別に両言語の移動表現「Vてくる」と“V来”の視点の差異を明らかにすることを試みる。考察の結果は以下の通りである。

日中両言語の「Vてくる」と“V来”文では、視座という要素が機能しているが、一人称と二人称/三人称の間の移動において、日中両言語の視座の決定のされ方の差異が見られた。この場合、日本語では話し手の視座が「発話当事者の視点ハイアラーキー」によって決定され、「Vてくる」が使用されない。中国語では、必ずしも「発話当事者の視点ハイアラーキー」によって決定されず、「perceiver expression³」と「発送・発信表現」の場合、視点移行を通して、他者の視座を取ることができ、“V来”が成立すると考えられる。

また、「発送・発信表現」の場合、特に話者が発送・発信したものが移動物である時、日中両言語の「Vてくる」/“V来”の不使用/使用という形態上の差異も見られた。その原因は、訳語が同じ動詞でも、その意味範囲が言語によって異なるからである。中国語ではその主動詞が方向性を含意せず、使役事象のみを表し、移動経路や方向性を明確に示す場合には移動補助動詞が用いられるのに対して、日本語では1語で到着点までの経路と方向性を含意する傾向が強く、移動補助動詞を取る必要がない。

発表では日中対訳コーパスから収集したデータを例に、視点分析が日中対照分析にも有用で、両言語の移動表現の相違点を体系的に明らかにすることができることを示す。

1 発話当事者の視点ハイアラーキー:話し手は、常に自分の視点をとらなければならない(久野 1978:146)。談話主題の視点ハイアラーキー:談話に既に登場している人物に視点を近づける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である(久野 1978:149)。

2 視点の意味合い:それぞれの文法項目には<視点人物/注視点/視座/視野/見え>のうちどの要素が関与するのか。視点の決定のされ方:それぞれの文法項目において視点(=視点人物・注視点・視座・視野・見え)はどのように決定されるのか。(古賀 2018:19)

3 「perceiver expression」の概念は Uehara(1998)による。

テキストマイニング技術から見た比較言語研究の可能性
——文章表現の社会的ジャンルの共通性から——
落合由治(淡江大学日本語文学科特聘教授)

比較文化研究において、言語研究の視点は比較の基本であり、言語表現に関する問題は大きな分野のひとつと言える。言語の比較研究に関する言語類型論は、言語学の基本的分野のひとつで、それが成立した19世紀から現在までほぼ同じ視点で継続して研究されている課題である。その中で、欧米語、中国語、日本語はそれぞれ対照的な言語類型に属すると考えられている。言語類型論の視点では、言語形式からみると言語の見かけ上の形態の差異や文法形式の異同等、主として形式的な語・文レベルの構造の比較が中心的視点であった。しかし、実際に言語が運用されている文章表現の社会的ジャンルで比較してみると、形式的な語・文レベルの構造の比較とは、また異なる観点を取り出すことができる。¹ここでは、言語資料の質的分析に応用されるようになったテキストマイニングを一つの観点として、英語、中国語、日本語について、各言語の文章表現の社会的ジャンル比較を考えてみたい。本発表では、以下の順番で考察を進めていきたい。

(1)19世紀からの言語類型論の代表的な論点を紹介し、20世紀後半に盛んになった文章談話研究の中での対照分析の視点について主な論点を述べる。

(2)異なる言語の比較の視点として文章表現の社会的ジャンルの観点から、テキストマイニングを方法として、サンプルとして英語、中国語、日本語の現代小説(物語文)、歴史記述(報告文)、人文系論文(論説文)を比較し、言語間での文章表現の社会的ジャンルの了解可能性の異同について考察する。

(3)言語の形式的差異に基づく比較言語学的研究に対して、テキストマイニングを方法として文章レベルでの意味的特徴抽出を行った場合、各言語の文章表現の意味的特徴抽出の了解性は言語の語・文レベルでの形式的差異には左右されず、むしろ文章表現の社会的ジャンルに影響されることが分かる。テキストマイニングでは、なぜ文章表現の社会的ジャンルの差異が言語の形式的差異よりも大きく影響するのか、その理由について、言語単位のレベルと言語の了解性の問題を中心に考察する。

(4)テキストマイニングのような自然言語処理による言語情報の特徴抽出技術は、比較言語学的視点から見た場合、言語表現のどのような構造を抽出できるのか、その可能性について考察し、言語研究の視点を拡大する方向性を定位する。

1 落合由治(2021)「漢字文化圏における「異」と「同」—テキストマイニングの観点から」『政大日本研究』18pp.253-271、落合由治(2021)「文章ジャンルに基づくテキストマイニング応用の考察—日本関連分野での活用を目指して—」『台湾日語教育學報』36pp.176-205 参照。

21世紀の「文化」の視座
——「近圏 closeness」と「遠圏 distance」の概念——
吉田若菜(フリーランス)

中国の人権侵害への抗議の意として、2022年北京冬季オリンピック大会への、米国による政府不参加率先表明のニュースは記憶に新しいと思うが、この一連の件を、「文化差異」への理解不足による著しい「齟齬」として捉えられる人はどのくらいいるだろうか。

そもそも、「人権」という概念自体、西方世界で生まれ発展したものであり、「権」、つまり「権利」そのものも、英語の rights の漢訳だ。英語の方は「正しい」という意味を併せ持ち「絶対軸」下にあるが、漢訳にあてられた「権利」は元来、「権勢 power と利益 interest」の意で使われ、今日においても「相対」感を拭いきれない。

この差はどこから来るのか。大元を辿れば、私たちヒトが、どのように身を取り巻く自然・社会環境を「知覚」するか、その仕組みの違いにある、と考えて良さそうだ。例えば心理学者(臨床)・河合隼雄は「母性原理・父性原理」の概念を用いたが、日本と中国に計20年スイスの外交官として駐在した Hans J. Roth 博士は、「近圏 closeness・遠圏 distance」という基軸に着目し、神経科学の知見も踏まえこれらの「違い」を説明する。

「近圏的文化 closeness-based culture」とは、五感のうち蝕覚・嗅覚・味覚という、比較的至近距離にあるものに対して有効な感覚器官が優位に働く「知覚 perception」が発展し、個々人がより緊密に、身を包囲する環境に組み込まれた(一体化する)社会文化を指す。他方、「遠圏的文化 distance-based culture」では視覚・聴覚という、より遠距離を手掛ける器官による「知覚」が発達し、個人が周囲環境から「(心理的に)身を引き離し」「観察者」の位置に立ちやすいとする。これら各々の「知覚」の発達は、物事に対して、前者ではより「丸ごと」見ること、後者ではより「分析的に」捉える傾向をもたらし、それらは更に、特有の思考・選択・行動の様式を形成して行く。

Rothによれば、「遠圏的文化」にあたる欧州と北米の他は「近圏的文化」のパターンを追う:どの文化においても、人は通常、自らの欲求実現と、集団への同化 assimilation から得られる安全との間で均衡を取りつつ生きるが、前者では「個人」が社会の中心にあり集団から比較的大きな独立性を持つのに比して、後者は「集団」を前面に据え、個人は所属集団を通して自分の立場を獲得し集団に緊密に組み込まれる特徴がある。

この、Rothの比較視座文化理論 Comparative theory of Culture¹は、特に空間と時間の知覚に注目し、「文化」を、ある時点での次の四項目の結果であると定義する:1)個人と自然との関係 2)個人とそのコミュニティとの関係 3)コミュニティと自然との関係 4)個人・コミュニティ・国と、伝統という形での前世代の文化との関係。

21世紀の文化学のスキームに一石を投じる新たな視座を、是非、紹介・共有したい。

¹ Hans Jakob Roth. *Kultur, Raum und Zeit: Ansätze zu einer vergleichenden Kulturtheorie*. Nomos. 2020 [第二版]

近代中国における女性同性愛を巡る言説の考察
——日本との比較を中心に——
楊妍(東北大学文系特任助教)

「同性愛」は19世紀から、宗教の問題(神への冒涇)としてヨーロッパで社会的犯罪として受け止められてきた長い歴史を持つが、近年では漸く世界全体で人権の差別問題として捉えるようになってきた。

中国における広義の同性愛の歴史を顧みれば、古代の中国には同性愛に対する規則はほぼ存在せず、文献に同性愛の記載は豊富に見られる。また、明朝の『金瓶梅』と清朝の『紅樓夢』などの文章作品でも同性愛を異性愛と同じく快楽の人間関係として描写されていた。男性同士の性関係とは対照的に、明清時期の書物の中に女性同性の性関係について注目されることは少なかった。その理由は、血統の純粋さを脅威されたことではないため、女性同性愛の社会的な意味は殆ど持たないからと述べられている。

しかし、民国時期に入ってから同性愛の歴史に異変が生じた。欧米の科学的な性文化が同性愛に「寛容」だった中国の社会に大きな影響を与え、同性愛は概念化され、「変態」として特別視されるようになった。20世紀初頭の日本と中国において、ドイツの医学者・精神科医であるクラフト＝エビングの「変態性欲心理」が導入された後に、欧米と同様に「変態」と呼ばれる「同性色情」は猟奇的なものとして当時の人々の目を引いた。

日本では、性科学者である田中香涯、澤田順次郎、羽太鋭治がエビングの論説から影響を受け、女性同性愛者と男性らしい女性とを結びつけた言説空間が成立した。そして、発表者はエビングの著作との食い違いから、女性同性愛に対して見分け方と治療方法を想定することは、田中らの独自の見解である可能性が高いと思われる。しかし、それをもたらした結果は同性愛者の心身に多大な損害を与えることがあったとしても、社会に及ぼす影響が少ないという結論を得られた。

一方、中国では1920年代に入ってから、「自由恋愛」、「新性道徳」など西洋からの新思潮が『婦女雑誌』、『民国日報・覚悟』などの刊行物で討論されるようになった。そして、「種族改善」に役割を果たせない「同性愛」に対して、章錫琛などの先進的な男性知識人がそれを「自然に反して」「変態」に近いと強く批判した。また、日本と比べると女性同性愛の予防が重要視され、そのため、性教育の重視及び異性間の交流を促進すべきと勧めた。その観点は、「種族に損害を与える」という結果に結びつけることではないかと思われる。

本発表の研究方法は、ドイツの医学者であるエビングの言説概念に基づいており、近代中国と日本における「女性同性愛」に関する受容にエビングの理念はどのような影響を与えたのかと、その間にはどのような相違点があったのかという問題を解明したい。従って、1920年代における中国の雑誌記事の言説を捉え、同時代の日本との比較を通して日中両国の近代化という重要なテーマに関してもその一側面に光を当てたいと思われる。

フィリップ・クレイの死とハーグ国際養子条約の問題点に関する考察
ウオント盛香織(甲南女子大学教授)

2017年5月21日に韓国で42歳の男性フィリップ・クレイの死が確認された。彼は9歳まで韓国の孤児院におり、その後アメリカ人家庭に国際養子として入り、37歳の時にアメリカから韓国へ国外退去させられた。新型コロナウイルスの影響により、アメリカへのアジア人国際養子数は減ってはいるものの、アメリカ国務省の2021年の報告によれば、昨年も韓国や中国を中心とする659人のアジア人の子どもたちが国際養子としてアメリカに入国しており、アジアからアメリカへの子どもの波は今も続いている。韓国からアメリカへの国際養子縁組は特に多く、1953年の朝鮮戦争以降約10万人の韓国人の子どもたちがアメリカに国際養子として渡っており、クレイは、こうした国際養子の一人である。

国際養子は「ハーグ国際養子縁組に関するこの保護及び協力に関する条約」(以後、ハーグ国際養子条約)や「国連子どもの権利に関する条約」等の国際規約によってその利益が守られているものの、実際に国際養子を巡っては、多額の金銭授受が伴ったり、誘拐まがいの事件が生じるなど問題が多い。

さらに法学者たちは、子どもの利益が守られていれば国際養子の国籍変更は不要である、とハーグ国際養子条約から理解できると議論しているが、クレイはアメリカ国籍を得られなかったばかりに、その犯罪歴ゆえに30年暮らしたアメリカから国外退去になったのである。クレイは20年に及ぶ窃盗や違法薬物関連の犯罪歴があった。合衆国法典1277は公共の安全の脅威になりうる犯罪行為をした外国人を国外退去に処すると定めており、仮にその外国人がアメリカで育ち、アメリカ社会しか知らない者であっても、生まれた国に強制的に退去させ、出自は考慮されない。ゆえに、クレイのように韓国語も話せず、韓国文化も何も知らないまま、実質アメリカ人である個人も、その犯罪歴ゆえに国外退去とされるのである。クレイは、韓国でホームレスやアルコール依存症に苦しみながら、2012年に自死した。

もしもハーグ国際養子条約が、国際養子が受け入れ国の国籍を子どもに与えるよう定義していれば、クレイの犯罪歴は不問にすべきではないにしても、彼の国外退去さらにはそこから起因する死は避けられたのではないだろうか。なぜ同条約は国際養子縁組において国籍供与を不問としているのだろうか。本発表では、クレイの死を参照しながら、ハーグ国際養子条約が国際養子の利益を本当に守っているのか、そして国際養子のウェルビーイングとは何かについて議論する。

研究発表
第5室(人文社会科学部1号館102教室)
2部 14:40-16:40

オンライン国際交流プログラムの実施と課題
大谷鉄平(北陸大学講師)

発表者が勤務する北陸大学では、2021年10月17日(日)、「世界の二次元事情」と題し、国際交流センター主催による姉妹校¹とのオンライン国際交流プログラムを実施した。本プログラムは初の試みであり、今後年1度の開催を継続してゆく方針であるが、開催までの過程、開催当日、開催後を経て、海外にて日本語を学ぶ大学生の関心、オンラインによる開催の困難点、オンラインによる開催の課題に対する日本人学生からの提案など、様々な発見が得られた。本発表では、これらを報告することにより、同様の国際交流プログラムを「実施する予定がある／すでに実施している」方々への考察の提示を行うとともに、改善への指摘を賜ることを目的とする。

本プログラムは、2部構成となっており、第1部では、以下のタイムテーブル²にある通り、4つのグループによる発表ならびに質疑応答、第2部では中国のアニメーション作家による講演と質疑応答、との内容である。

開会・趣旨説明(5分、司会)
グループA発表(15分(～18分))
グループB発表(15分(～18分))
グループC発表(15分(～18分))
グループD発表(15分(～18分))
全体討議(約30分程度)

【第1部】グループ間での質疑応答／【第2部】フロアとの質疑応答

本プログラムへの海外からの参加者数は【図1】の通りでありテーマの「二次元」への関心の高さが改めて確認されるが、一方、日本人学生(北陸大学在学)へのアナウンスも徹底したものの、参加者は2名にとどまった。

中国(大陸)		台湾		韓国		タイ	
教員	学生	教員	学生	教員	学生	教員	学生
1	43	0	38	1	13	0	23

【図1】海外からの参加者数

また、オンラインツールは Teams を用いたが、複数の課題が確認された。開催後の学生との振り返り会から、改善への提案が出されたため、これについても報告したい。

1 実際は、国際交流センター長の提案で、姉妹校以外の大学(韓国、1校)も含まれる。
2 グループAは北陸大学の日本人学生、B・Cは姉妹校学生、Dは姉妹校以外の学生。

日本のポップカルチャーを対象とした印象評価の検討
——印象語調査と印象評価アンケートツールの開発——

森崎巧一(京都経済短期大学教授)

郭潔蓉(東京未来大学教授)

小路真木子(京都経済短期大学教授)

日本の文化的価値をアピールして海外からの需要獲得を狙うためのブランド戦略(クールジャパン政策やクールジャパン戦略など)が進められて久しいが、その中でも日本の生活文化から生まれたコンテンツやファッション、日本食などが海外でも人気を博し、特に日本のポップカルチャーの代表的な漫画やアニメなどのコンテンツが高く評価されている。

そこで筆者らは、日本の漫画やアニメのデザイン的な特徴が及ぼす各国の人々の印象評価への影響に注目し、JSPS 科研費(19K03101)の助成を受け、「印象評価と画像解析を用いた異文化感性理解支援ツールの開発」の研究プロジェクトを遂行している。この研究では、筆者らがこれまで実践してきた印象評価の研究手法と印象評価分析ツールの開発技術を活かし、異なる文化的感性を持つ各国の人々を対象に、日本のポップカルチャーコンテンツに対する認識や受け止め方の共通点や相違点を見出そうとしている。

その基礎調査として、漫画やアニメを対象にした日本国内での意識調査と印象語収集調査を実施した。アンケート調査会社を通して全国的な規模で調査を行い、10代から70代までの男女合計約1000人の回答データを収集した。日本の漫画やアニメに対する興味度を調査した結果、漫画・アニメともに興味があると回答した人は半数を超え、これらのコンテンツに対する関心がある程度高いことが分かった。また、印象語収集調査では、漫画・アニメのキャラクターに対する印象語を約1700語収集した。

以上の調査と並行し、印象語収集ツールの開発を行った。印象語収集ツールはWebアプリケーションとして開発し、PCやスマートフォンから効率的に印象語データを収集できる。回答結果はデータベースに保存され、管理画面から回答状況の確認、集計、ダウンロードなどが行える。上記のアンケート調査会社による調査とは別に、この印象語収集ツールを用いて、京都経済短期大学の森崎の担当授業の中でアンケート調査を実施したところ、回答数は約400(4名の教員を含む)、印象語は約500種類を収集することができた。以上の2つの調査により収集した語彙を精査し、重複する言葉や同意語を纏め、漫画・アニメのキャラクターの印象を評価するための代表的な印象語として最終的に約20語を選定した。

以上の調査結果やツールの開発内容をふまえ、次のフェーズとして現在は印象評価WEBアンケートツールと印象評価データを管理するデータベースの開発を行っている。このツールでは、印象評価入力機能、印象語の追加収集機能などを盛り込み、選定した印象語やキャラクター画像を貼り込むことで日本語版はほぼ完成段階となった。今後、アンケート内の文章や印象語を、日本語から中国語(台湾語)や英語などに翻訳し、外国語版の印象評価アンケートツールを作成する必要がある。そして、国内外で日本人と外国人を対象とした印象評価実験を行う予定である。

「繋がり」と地元愛を促進するプロジェクト・プランニング
——地域社会の将来的発展と活性化にむけて——
関口英里(同志社女子大学学芸学部メディア創造学科教授)

コロナ禍による社会全体の停滞が地域経済やコミュニティ活動に深刻な影響を与えている。これまで継続的に地域貢献活動をアクティブラーニングとして実現してきた本学科のプロデュース系講座プロジェクトが現在取り組むべき課題は、まさに地域の様々な位相における「繋がり」を醸成し、いかに町を活性化させていくかということである。その取り組みの一つとして、昨年度は子供と地域の交流機会の減少という課題に焦点を当て、その改善活動を通して主役となる子供達のみならず、企画に関わる市民や商業施設、また学生自身にも多角的なベネフィットを生む活動を行った。

一過的でない本質的な地域活性化の実現には、現在社会の主軸である大人世代だけでなく、未来を担う子供達への体験型教育が大きな鍵となる。幼少期からの地域参加や、地域への愛着形成の要素として、人との繋がりを大切にする思いを養う重要性は、多くの先行研究でも指摘されている※。そこで我々は市内の保育園と連携し、園児達が鮮やかな絵を描いたビニール傘を近隣の商業施設吹き抜けに広げて展示する「アンブレラスカイ」を実施した。またロータリークラブ協力のもと、作品を見た来場者が思いを書いた伝言カードの掲示も行った。カードは後日子供達に届け、外部評価による達成感と繋がりを体得させた。

この事業が実現した主要な成果は、①立場を超えた地域連携の場づくりと促進、②参加した子供達のみならず企画側の大学生それぞれの学び＝教育効果と心理的成長、③商業施設や参加団体にとっての宣伝・経済効果、という3点に集約できる。これらは事後調査からも実証され、本企画の主催者側、受け手側、また企画に関わった全ての立場へのベネフィット増幅をもたらし、コミュニティを重層的に活性化する可能性が明らかとなった。

地元社会や経済を盛り上げ、短期的利潤に留まらぬ長期的発展をもたらすためには、あらゆる立場や世代が交流し持続する地域イベントの実施と参加促進が重要であり、特に子供世代の地域愛と地元定着志向の生成が必須である。打ち上げ花火的なムードの高揚や一時的消費増加といった即自的かつ可視化し易い効果をもたらす従来の「町おこし」イベントではなく、広く深い繋がりの中で市民の地元貢献意欲を培い、将来的な繁栄の可能性をもたらした本イベントは、新たな地域活性の大きな指標となったといえる。そして何より、こうした取り組みは、継続してこそ真価が発揮される。今回の成果を土台とした効果検証を行って企画をさらに発展させ、今後も一層の地域貢献と教育活動を実践したいと考える。

※一例として、太町 智「幼少期における子どものコミュニティへの参加の可能性」(『生活科・総合学習研究』10. pp.11-9. 愛知教育大学 2012)、青柳涼子「地域愛着および地域とのつながりを規定する要因の探索的分析」(『淑徳大学大学院研究紀要』24. pp.25-42. 淑徳大学大学院総合福祉研究科 2017)など多数。

多文化共生が進む自治体における地域連携活動
「足立区大学生地域活動プラットフォーム」活動報告

森下一成(東京未来大学教授)

郭潔蓉(東京未来大学教授)

はじめに

本報告は、都内有数の外国人居住者を擁する足立区において、足立区役所(東京都)、NPO法人足立フォーラム21(以下、「フォーラム」)、東京未来大学によって、2018～2019年に実施された「足立区大学生地域活動プラットフォーム」(以下、「プラットフォーム」)の活動について、特に多文化共生施策の視点を加味して報告するものである。

1 活動に至る経緯と目的 ～足立区の政策目標としての「文化教育立区」

2004年、足立区は法定計画として策定した「基本構想」に「人間力と文化力を育み活力あふれる文化都市」を掲げ、2005年にはその具体化として、千住地区を中心とした「足立区文化・産業・芸術新都心構想」を策定した。この構想に基づき、足立区は6大学を誘致して現在に至っている。大学という地域資源を活用し、「大学生が区内企業や地域団体等と交流し活動していく中で、新たなつながりが生まれ、大学生が区に愛着を持つようになり、地域での活動がさらに広がることや、卒業後も足立区との関わりを持ち続けてもらえることを目的として」、2018年以来、プラットフォームの活動が進行している。

2 プラットフォームの内容

プラットフォームの活動は大別すると以下ようになる。

(1)フォーラムのコーディネートによる区内企業との協働

フォーラムが区内企業に依頼して、企業見学とその企業での就業体験を企画し、区内大学生が当該企画に参加するもので、2年間で学生のべ200名以上が区内企業と交流し、協働した。企業見学の参加者に比して就業体験の参加者は少なく、およそ4分の1から5分の1に留まったものの、企業見学は後述の(2)の契機となることもあった。

(2)地域主体と学生の自由意志による協働

行政やフォーラムが関与せず、ボランティア団体や企業等と学生がその自由意思によって協働するもので、地域日本語教室への参加や学生が企画する新商品開発やイベントの開催などで協働した。この協働は、(1)を経て行われるものとそうでないものに分類できる。後者の場合、講義科目「地域連携」を経て実施されるものが少なくなかった。この「地域連携」はプラットフォームについてのガイダンスとなる講義であり、この講義内容に触発されてフォーラムが企画する以外の地域活動に没入する学生がみられた。また、(1)に参加した学生がその枠組みを超えた活動を志向する例も少なからずみられた。

本報告では、まずプラットフォーム事業の概要について報告し、続いて多文化共生が進む足立区内における地域日本語教室での協働について報告するものである。

